

丈夫な教室

「彼女はいかにしてハサミ男からランドセルを奪い返すことができるか」

登場人物

アマ 天野恵子。会社員。

ミウ 小山佳子。主婦。

カノ 高野美幸。教師。

宝田 学校の用務員。

多田 ママさんバレーのメンバー。タダーンの妻。

羽賀 多田のチームメイト。

舞子 羽賀の娘。カノが担当するクラスの生徒。

タダーン 多田団。警官。

ミチコ 日吉美智子。音楽教師。

松尾 教師。

エース ママさんバレーのメンバー。

岩木 警察官。

平良 ホステス。

神野 木工所の作業員。ジジーンと呼ばれていた。

プロローグ 放課後

五月の半ば。とある田舎町の小学校の音楽室。

放課後。ミチコが訪れ、ピアノでショパンの「雨だれ」を弾きはじめる。

演奏中、ゆっくと日が沈みだし、曲が終わる頃にはすっかり暗くなる。

虫の音。

弾き終わるとミチコはピアノの鍵盤から目を外し、あたりを注意深く見渡す。何の気配もないことを感じると、音楽室から立ち去る。

暗転。

次第に、闇に目が慣れるかのように、月明かりに照らされたアマとミウの姿が現れる。

一

ミウ ……ね、アマ。誰かしら、今の人。

アマ ただの事務員じゃない。

ミウ そうかしら。

アマ 何よ、平気な顔して相手してたくせに。

ミウ 話しているうちに思い出すかって。

アマ どういうことよ。

ミウ ね。いなかったっけ、昔。あんなおじさん。

アマ もう何年たってんのよ。人から何から入れ替わってるって。

ミウ ……そりゃそうかもしれないけどさあ。

アマ 校舎も、まっさら。赤の他人よ。

と、アマは教室の机を見つめ、ミウは教室の探索をはじめめる。

ミウ (ピアノを触り) ……弾けなかったなあ。いつか弾けるようになりたいと思っ
ていたけど。

アマ でも、この匂いは変わらないな。鼻の奥に突き刺さる、ワックスにまじった、ち
っとも落ち着かないこの匂い。 ……見ては忘れる悪い夢みたい。

ミウ、ピアノを少し弾いてみる。

ミウ ソナチネいく前に諦めたな。きっと、もうおぼつかないわ。

アマ 音の記憶は違うのよね、匂いと違って。耳障りな音なんて、脳が勝手に削除す
らしいの。

ミウ、ピアノを弾き続ける。

アマ ……しかも音楽は苦い経験を洗い流して、人生の試練や受難として美化してくれ
る。辛いとき、同じ曲を繰り返して聴くのはそういうことだと思ふのね。でも、匂い

の記憶はストレートというか、あまりにも下品。過去をありのまま引きずり出すっていうか……。

ミウ でも、楽しかった頃の曲を聴くと、悲しくなるのは何故かしら。

アマ でも、これって、そもそも、なんの匂いだろ。

ミウ ……この匂い、緊張しなかった？

アマ そうねえ。

ミウ 子供の頃は社会って感じしたなあ。

アマ 国語、算数、理科、社会の社会？

ミウ 社会全体を表す社会。一年ずつ確実に階段を昇らなきゃいけない重圧。

アマ あの頃一年って、随分はつきりしてたわよね。

ミウ 一年生の頃は、六年生が随分大人に見えたな。でも、六年生になっても私は私のままだった。そして中学生がやっぱり大人に見えたけど、なってみれば同じ私。高校、大学が上がっても私は変わらず、社会人になっても結局そうだった。身につけるものや恋人が変わっていくだけで私は私。結婚して名字が変わった。違う名前で呼ばれるようになった。で、子供を生んで母親になったけど、どこがどう変わったのかなってよく思う……そういうことつらつら考えてると何か怖くなってくるのよね……うちの子、もう小学生よ。

アマ あのやたらしつかりした子？

ミウ どんな目で私を見るんだろうって思うの。普通に母親と思っているのかしら。友達なのかしら……女として見たりするのかしら。私といて、心から安らげているのかしら。お母さんの匂いを感じてくれているのかしら。私も子供なのに。

アマ ……匂うわよ、ミウ。

ミウ え？

アマ 乳臭い。

ミウ 私が？

アマ ミユはね、昔からずっと乳臭かったのよ。

ミウ 何で今さら幼稚って言われなきゃならないの？

アマ 違うわよ、体臭。……あなた、乳臭い。

ミウ (あわてて自分の匂いを嗅ぐ)……匂うの？ そんな、誰にも言われたことないのに。

アマ ずいっと気になってただけど、やっと言えた。すっきりした。

ミウ 失礼ね。二年ぶりに会って、それ？

アマ 二年？ 違うでしょ、オカマほられてどうしようって、あれ去年よ。出張中だったのに。

ミウ そうだっけ。

アマ ああ、わかった。

ミウ え、じゃ、いつよ？

アマ ……この部屋の匂い、子供の匂いよ。

ミウ は？

アマ 子供の匂い。どう思う？ 乳臭い母親として。

ミウ わからないわよ、どうして匂いにこだわるの？

アマ はつきりさせないと滅入るのよ。ここに來てから妙にボーっとするのは何のせい
か、それは子供の匂いが原因だって結論付けたいの。

ミウ 決めつけても、混乱するだけよ。

アマ 気にしない、深く考えない、主婦の幸福論。

ミウ ぶつくさ言わないで探してみたら。……ある訳ないと思うけど。

と、再び教室の机の表面を、見つめる。

アマ (並べられた机を眺め)……何もかも小さく見える。視覚の記憶というのは勝手
なものよね。新しい環境によって同じ物でも違って見えるの。ずっとこの机を使って
いれば、ここまで小さく見えないはずなのに。

ミウ それって、新しいデザインの物が出ると、今持つてる物が頼りなく見えるのと一
緒？

アマ 違うわよ。……愛用のバッグに新作出たの？

ミウ 買いだめしたファブリーズに新しい香りが出たの。

アマ ぶちまけたいわファブリーズ。持ってきたよ。

ミウ いやよ、もったくない。

アマ なんで買いだめなんかするの。

ミウ あ、それとね。

アマ 何よ。

ミウ 実家に張ったチェッカーズのポスター。あれって、ダサかったのね。

アマ みんなどうかしてたのよ。

ミウ、イスをこついてみる。硬い木の音がする。

ミウ ……ねえ、こんな椅子だったっけ。硬たい椅子。学校以外ありえない。

と、木の椅子に座ってみる。

アマ (椅子にまたがり) まるで拷問ね。子供を一日中この椅子に座らせるんだから。
きっと教師は全員Sのはずよ。子供をこの硬い椅子に縛り付けて満足するの。

ミウ 違うでしょ、それは。

アマ Sよ。

ミウ 中にはいるかもしれないけどさ……。カノは違うでしょ。

アマ あー、カノは違うか。あんたと一緒にDMだわ。

ミウ 乳臭いの次はマゾ。

アマ Sだからわかるのよ。苛めて欲しい人かそうでないかってことぐらい。部下も上司も一目でわかる。

ミウ まともに社会人してる？

アマ でも、健全よ。その人たちって、苛めてって顔して寄ってくるんだから。私も気を使ってあげてるの。しかもそうした方が仕事の効率よかったりするのよね。

ミウ なに教室でパワハラ語ってるのよ。

アマ 私も教職とつときゃよかったかな。

ミウ 向いてないわよ、暴力教師。

アマ 殴った後、ぎゅって、抱きしめてあげるの。

ミウ やめなさいって。

アマ 確実に落とせるから。

ミウ ……でも、この椅子。今見ると痛そうだけど、子供の頃はそうでもなかったわ。

私、何時間も平気だったもん。

アマ 身軽だったのよ。人生の重みってものをわかってない。背負ってるものなんて教科書の入ったランドセルだけなんだから。

ミウ 重かったわよ。アマに持たされて。後ろにも前にも。

アマ ジャンケン弱いよ。

ミウ 勝ち負け関係あった？

アマ でも、私が背負わせたから命拾いしたんじゃない。

ミウ 一生言われ続けるわね、それ。

アマ、ある机の表面に注目する。

アマ ね、ミウ。これ見てよ。

ミウ え。あった？

アマ これ。

ミウ ……何よ。何も書いてないじゃない。

アマ 穴。

ミウ なによ、こんな穴。

アマ これってさ、掘った子の心理的な何かを表してるのかな。心の空洞？

ミウ 暇つぶしに掘ったんじゃないの？

アマ 私も落書きと一緒に穴開けたなあ。開けた穴は、ピアスになった。
ミウ どういうこと。

アマ ……私、ピアス開けたのは、何かを身につけたかった訳じゃなくて、ただ体に穴を開けたかっただけなのかもしれないな。これ掘った子だってそうなるのかも。
ミウ そうかしら。

アマ ね。よく見るとこんな引つ掻き傷……。この子、間違いなく手首切っちゃうね。

ミウ あなたまだリスカしてるの？

アマ なによ、リスカって。キットカットの姉妹品みたいに。

ミウ リストカットのことでしょ。

アマ やんない人には理解できないわ。

ミウ 興味はあるわよ、何でするんだらうって。でも、意味あるの？

アマ する側にはあるのよ。でも、あなたみたいな天国の住人には理解できない。

ミウ 天国の住人？ 私が？

アマ なんて言うんだらう。「幸せさん」ってところかな。

ミウ 幸せさん？ もしかして、褒められているのかな。

アマ 何でもいいようにとるくせに。

ミウ 机の穴はピアス。引つ掻き傷はリスカ？ それじゃ、カノが見つけたっていう机の落書きは、入れ墨かな。

アマ 冗談じゃない。

ミウ 何よ、違うの。

アマ あの落書きは恨む気持ちで彫ったの。呪いのように。どうして体に一生刻まなきゃならないのよ。

ミウ 刻むってことは忘れないためじゃなかったの。

アマ 私は吐き出したかった。傷付けたかったのよ、机を。そんな傷痕は消えてなくなっってほしい。

ミウ でも、カノの言う通りだったらどうする？

アマ どうかしてるのよ……。私がわざわざ帰って来たのは、その落書きを検証して、カノの目を覚ましてあげるためなの。どうしてそんなものが残っているのよ。

ミウ そりゃ、冷静に考えると、おかしい話だけど。

アマ カノ、何やっているんだろ。……こっちは仕事残して来てるんだから。暇もてあましてる身分じゃないのよ。

ミウ 私も家事ほったらかして、嘘までついて来てるんだから。

アマ 何よ。嘘って。

ミウ 友だちと温泉旅行って。

アマ のんきねえ、もっとマシな嘘あるでしょ。

ミウ ……。(ため息をする)

ミウ、イライラする自分のためにピアノを弾こうとする。

アマ 何すんのよ。

ミウ 音楽でイライラを癒すの。

ミウは「野ばら」を弾き始める。

ミウ この曲、よく直子に弾いてもらったよね。

アマ ああ、弾いたよね、ピアノ。

ミウ でも、楽しかった頃の曲を聴くと、悲しくなるのは何故かしら。

ミウはピアノを弾きながら「野ばら」を歌う。

「野ばら」

童は見たり 野中の薔薇

清らに咲ける その色 愛でつ

飽かずながむ 紅におう

野なかの薔薇

歌の途中、カノが血相を変えて入って来る。手には鞆とランタン型の電灯。地味なワンピースの上にジャージを羽織っている。

カノ もう、静かに待っててよ！

ミウ (ピアノの手を止め) ごめんごめん。つい。

カノ 勝手に弾かないでよね。

アマ 何よ、あんたこそ電池探しに何処ほつつきまわっていたの？ もう九時まわって
るじゃない。

カノ でも、これ。ちゃんと点くから。……ほら。

と、持ってきたランタン型の電灯を自慢げに点ける。

ミウ お。いいんじゃないの？ 雰囲気出で。

カノ でしょ？

アマ こんなの学校に常備されているんだ。

カノ キャンプとかで。

ミウ あ。

カノ キャンプ感出るでしょ。

ミウ 出る出る。

カノ 出してもしょうがないんだけど。

アマ やっぱり先生はジャージ似合うね。

カノ 何よ。やっぱりって。

ミウ カノ、プーマ着てるの？

カノ え。プーマでいいじゃない。ダメ？

ミウ あれ、どっちかってえと、ダサかったんじゃない？ プーマって。

カノ それ、いつの話しよ。

アマ でも、ブランドよ、プーマは。ミズノとか一緒に。

カノ なに。引つかかるもの言い。

アマ いやでも、ジャージ着て仕事できるって、楽ちんよねえ。

カノ 楽じゃないわよ……。失礼ね。

ミウ (電灯を手に取り) これでちゃんと見えるかあ。

アマ 携帯の明かりで見えないこともないんだけど。

カノ 今の用務員さん口うるさいから。まだ宿直室に明かり点いてたわ。

アマ ……ああ。

「丈夫な教室」

アマ その人なら、さつき現れたわよ。懐中電灯持って。おじさんでしょ？
カノ え？ ……マジ？
アマ マジですよ。
カノ 隠れてた？ 見つからなかった？
アマ びっくりしてたね。
カノ え。
アマ そのおじさんが。
カノ 何？ 見つかったの？
アマ 「どうも。」って。
カノ おじさんが？
アマ この人が。
カノ ミウが？
ミウ こう言う時は、堂々と振る舞わないと「私たちは高野先生の友だちなんです」って。
カノ そしたら？
ミウ 確か……。「今夜は冷えますねえ」って。
カノ 怪しまれなかったの？
アマ 「先生がいつもお世話になっています。」って。
カノ え。それで。
アマ それだけ言っ、去って行った。
ミウ どういう立場で何様のつもりだったのかしら。
アマ それはあなたでしよ。
カノ だから、ちゃんと隠れていてよ。
アマ この人、自由にするのが間違いよ。
カノ だから早朝の方が人いないのに……。
アマ 都合いいのカノだけじゃない。そのまま出勤すればいいんだから。
カノ 私の都合だけじゃないでしよ。
ミウ 私、早朝、絶対無理よ。どんな近くに宿とつても起きれないから。
カノ 休日も埋まってるって。
ミウ 家族サービス受けなきゃ。
アマ （カノに） ……ねえ、あの用務員おじさんって、私たちがいた頃、いなかったわよね。
カノ まさか。来たの、四、五年前じゃないかなあ。
アマ そのはずよねえ。 ……ね、ちよつと、ミウ聞ってる？
ミウ （懐中電灯に興味を示し、聞いてなかった） ……ん？ 何か言った？
カノ （ミウの持っている懐中電灯を奪い）ちよつと私、一言、言いに行ってくる。

と、出て行こうとする。

アマ　ちよつと。また待たせる気なの？　……どの机にあるのよ、私たちが書いた落書。
カノ　……じゃ、見てみる？

と、机の一つに近づき電灯で照らす。

アマ　何よ、そっち？
カノ　うん。……これ。
アマ　私が使っていた机に彫ったのよね。でも、その机、古くない。
ミウ　ほんと。
カノ　そうなんだけど……。

アマ、ミウ、机に近づく。カノは机の表面に書かれている落書きを読む。

カノ　ハサミ男死ね。この教室に入るべからず。この教室に入るべからず。
ミウ　……この教室に入るべからず。
カノ　これ、彫ったわよね。
ミウ　うゝん、多分。こんなのだったと思う。
カノ　二人とも覚えてない？
ミウ　覚えてるっていうか。
アマ　何で聞くのよ。そうなんでしょ？
カノ　だから、そう見えてしまうから来てもらったんじゃない。何イライラしてるのよ。
アマ　してないわよ。
カノ　してるじゃない。
ミウ　ね。見せてよ。
カノ　見せてるじゃない。
ミウ　……じゃなくて、文集。
カノ　ああ、ごめん。持ってきた。

と、持ってきた鞆から文集を取り出す。

「丈夫な教室」

アマ　そんなの出て来るんだ。
カノ　ここを何処だと思っているの。
ミウ　どんな字だったっけ、私の字。

カノ、ミウ、文集を開けて見る。アマは文集に興味を示さず、黙ったまま机を見つめる。

カノ ……ほら、これがミウの字。

ミウ (机の字と見比べて) やだ、似てる。癖が。

カノ そっくりっていうか、まんまでしょ。この机の字がミウで、これが私の字だと思う。……アマのは。

ミウ やっぱい……。ミステリーね。私たちが彫った落書きがあるはずないと思っていたけど、そんな気になってきた。

カノ えーっと。あとアマの字は、どれだっけ。

ミウ (途中のページを指し) あ！ これ懐かしい。直子じゃない。

カノ 直子のは、クラス日記に書いてあったものが載せられたのよね。

と、直子のページで手が止まる。

ミウ ……思わず読んじゃうね。

カノ ピアノのこと書いてあったね。

ミウ この、端の方、なんて書いてあるの？

カノ ん？ ……ジジーン。アハーン。

ミウ チューリップ。……どういうこと？

アマ ちよつと、脱線しないでよ。

カノ ごめん、ごめん。アマの字よね。

ミウ あれ？ ちよつと違わくない？

カノ それ隣だから。

ミウ (机の字と見比べ)ほんとに、似てる。アマの字よね。

アマ (文集の字を見ずに)冗談じゃない。

ミウ 何よ、検証して否定するんでしょ？

アマ カノ、何がしたいの？ びっくり？ どつきり？

ミウ そんなことしないでしょ。(カノに)ねえ。

アマ その彫った字、くすんでない。木の傷痕もまだ生々しい。

カノ そうなんだけど。

ミウ ……そう言われると、な〜んか違って見えてくるわね。

アマ (ミウに) あんたもしっかりしなさいよ。

ミウ え？ 違うと思ってるんでしょ？

アマ じゃなくて。

ミウ 何よ。

アマ 痛みの記憶は消えない。忘れるわけない。私、ちゃんと覚えているわよ。昔の字と見比べなくても。

カノ ……アマ。

ミウ ね、カノ。これ、何かの偶然よ。

アマ それは私の傷痕よ。傷の形は何年経っても変わらないもの。私、毎朝見てるから、自分の顔……。でも、どうして傷痕がそんなに生々しいの。

アマ、無意識に額に手を当てている。

カノ どうしたの？

アマ (理性的に務めようと机から離れ) ごめん、私、何言ってるのか解らなくなってきた。匂い。この匂いのせいよ。いや、気分悪い。

カノ 大丈夫？ ちょっと落ち着いて。

アマ あんた最悪！ 何が楽しいのよ、こんなもの見せて。つまらない冗談。

ミウ アマ。

と、アマを気遣い、近づく。

アマ (近づくミウの手を乱暴に払い) 触らないで！

アマ、離れた椅子に座り、二人を拒む。

沈黙を破るように、懐中電灯を持ったジャージ姿の宝田、教室に入ってくる。

宝田 あんたら、何やってるの。

カノ 宝田さん？

宝田、懐中電灯でカノの顔を照らし。

宝田 え。高野先生？

カノ ……すみません。

宝田 こんな時間に何の用？

カノ お伺いしようと思っていたんですが、失礼しました。この人たちなんですが……。

宝田はミウの顔を照らし。

宝田 誰？

カノ え？

宝田 父兄の方？

ミウ、カノの持ってきた電灯で自分の顔を照らし。

ミウ どうも。

宝田 は？

ミウ 私たち、ここの同窓生なんです。小山佳子と申します。

宝田 ……どう言うことなんだよ先生。こんな時間に同窓会かよ。

と、教室の蛍光灯を点ける。

カノ あれ、もう会っていたんじゃないの？

ミウ 知らない、あの人。

カノ え？じゃ、誰と会っていたのよ。

ミウ ……さあ。

カノ ええ？

宝田 困るねえ、いくら先生でもこういう事してもらっちゃ。後で始末書かいてもらおうよ。

「丈夫な教室」

カノ はい。

宝田 「はい」ってねえ、先生。反省してくれてるの？

ミウ えらそうに。「反省してくれてるの？」用務員でしょ。

宝田 ん？ 何か言ったか。

カノ ちよつと、黙って。

宝田 今、あんた、何て言った。

ミウ 何よ、怒らないでよ。

宝田 怒ってないよ。

ミウ 怒ってんじゃん。

宝田 仕事なんだよ。あんた方が非常識なんですよ。

ミウ あなたね、何が常識で非常識か解ってるの？ 私から言わせてもらえば、あなた

の方が非常識よ。私、名前名乗ったわよね。小山佳子。あんた何よ、名も名乗らずに。

なんていうの？ こういうの。無礼？ そうよ無礼よ。無礼者め。

宝田 あんたどつか壊れてないか？

ミウ 名を名乗りないさいよ。

宝田 俺は宝田って言うんだよ。

ミウ 宝田。

宝田 呼び捨てかよ。

ミウ 下の名を言わないからよ。

宝田 なんで教えなきゃいけないんだよ。

カノ よしなさいって。どうでもいいでしょ。

ミウ 答えなさいよ。

宝田 うるさいって。

カノ 宝田明っていうのよ。

ミウ はは。

宝田 黙ってるよ、先生。

カノ あ、すいません。

ミウ え。まじ同姓同名？

宝田 何がおかしいんだよ、あんたの方が無礼じゃねえか。

ミウ かわいそ。

カノ 笑わないでよ。宝田明なんだから。

ミウ はは！

宝田 だから、言うなって。

カノ すいません。

宝田 失礼だろ。本人に。……俺も本人だけどさ。

ミウ いやいや、ごめんなさい。

「丈夫な教室」

宝田 とつとと帰ってくれないか？ 後で困るのはこっちなんだよ。
カノ ええ、すぐ出ますから。
宝田 頼むよ先生。
カノ はい。

宝田、机につつぶしているアマに気付く。

宝田 あの人は？ どうしたんだ？
カノ あ、彼女は、ちよつと。
宝田 なんだ？ 気分が悪いのか？
アマ (宝田を見て) ……はは。
宝田 何がおかしいんだよ。
ミウ アマ、おかしくなったんじゃないわよね。
アマ ははは。
カノ どうしたのよ。
アマ ……プーマ。
ミウ ほんとだ。プーマだ。
カノ いいでしょ、もう。何がどうおかしいのよ。
宝田 プーマのジャージ着ちゃいけないのかよ。
カノ すいません。(アマに) 大丈夫？
アマ ちよつと気分悪い。
ミウ 何。匂うの？
宝田 え。(気にして自分のジャージを嗅ぐ)
アマ (額を手でなぞる) ……あれ？ ねえ、ミウ。
ミウ ん？
アマ (額を見せて) 切れてない？
ミウ ないよ。どうして？
アマ そう。
宝田 ……そーういや高野先生。最近見なかったよね？
カノ ええ。
ミウ 何よ、休んだの。
宝田 あれ、確か、倒れたんじゃないか？
カノ ええ、合唱練習の時にちよつと。……おかげ様で明日から出ることにしています。
コンクールも近いことですし。
宝田 だったら無理しないで。明日くりやいいんじゃないの。
カノ それが、どうしても気になる事があって、この人たちについて来てもらったんで

す。

宝田 気になること？

カノ ええ、それが……。

ミウ ねえ、ねえ。

カノ 何よ。

ミウ カノ、合唱みれたりするの？ 凄いな。

カノ 駄目よ、ピアノ弾けないし。普段は専門の先生に……。

宝田 で？ 先生、何だよ。その、気になる事って。

カノ 音楽室の机に、私たちが子供の頃書いた落書きを見つけてしまったんです。

宝田 は？ 落書き？

カノ おかしな事だと思いますが。

宝田 いつ？

カノ 一週間前です。

宝田 なんだ、その倒れた時に。

カノ ……。

宝田 ここで？

カノ ええ。

宝田 あのさ、先生もそうだろうけど、みんないい年してるんだろ？ この春、中学に上がったお嬢ちゃんじゃないんだからさ。使っていた机が何十年も残っている訳ないだろ。

カノ おっしゃる通りなんですが。

ミウ 失礼ね。何十年もじゃないわよ。

宝田 違うのかよ。

ミウ ……二〇数年よ。

宝田 一緒じゃねえか。

カノ でも、同じものが書かれているんです。そっくりそのまま。悪戯にしてもおかしな話だと思っただろう。

宝田 おかしなことをおっしゃるね。

カノ 見てみます？

宝田 ああ、いいよ。

ミウ カノ、よそうよ。

カノ、宝田に机の落書きを見せる。

カノ これなんです。

宝田 ……ハサミ男、死ね？ 何だよ、死ねだなんて。書いちゃいけない言葉だなあ、

曲がりなりにも先生だろ？

カノ すみません。

宝田 まあ、ガキの頃の悪戯だからしょうがないけど。

カノ いえ……。

宝田 くつきり彫ってあるなあ。この机、こんなに酷けりや年度末に取り替えるぜ。いや、今すぐにも替えなきゃ。なあ、これマジでいつからあったんだよ。

ミウ ねえ、おじさん。……ハサミ男って聞いたことない？

カノ 何聞いているのよ。

宝田 ……知らないね。

ミウ 学校で話題になっているとか。子供が書きちゃうくらい。

宝田 知らないって。そんなことは先生の方がよっぽど詳しいんじゃないのか？

ミウ カノ、そんな噂、あたりしないの？

カノ ないわよ、そんなの。

宝田 (アマに) 三人で書いたって？ あんたもか？

アマ そうよ。

宝田 何だよ、ハサミ男って。……チョツキン、チョツキンって、電車の中とかでスカート切ったりする痴漢の事か？

アマ 違うわよ。

ミウ そんな願望ありそうでやだ。

宝田 ねえよ。本当、失礼だなあ。……っていうか、何で俺に聞くんだよ。(カノ) 何だよ、そのハサミ男って。

カノ ご存知ないと思いますが、私たちが小学生のとき、学校にハサミを持った男が現れて暴れた事件があったんです。男はその場で取り押さえられましたけど、何しろ突然のことで、先生もうまく対応ができなくて。

宝田 へえ、おつかない話があったもんだな。

ミウ 本当の話なのよ。ちょうどそのころ、飛行機が墜落したか何かで、大きく報道されなかったんだけど。

宝田 聞いてねえよ、そんな話。

カノ では、失礼しました。私たち、もう出ますから。

宝田 ……でも、そんなおつかねえ話じゃないと思うんだけどさあ。

ミウ え、何よ。

宝田 いやね、今、学校でちよつと面倒なことが起こっているみたいでさあ。

カノ 面倒なこと？

宝田 先生は休んで、知らないかもしれないけれど、やたら防犯にうるさくなって。

俺が来てからこんなことなかったのに。

ミウ どういうことよ。

宝田 こつちが聞きてえよ、理由も告げずにだ。

宝田の携帯に着信音。

宝田 ……はい、宝田明です。今、はずしているんで。……はい。ええ、電気ですか？
あ、音楽室が気になって。ええ、私に来てるんですけどね。巡回中に。いや、特に、
物音がしたかなあと……。戸締まり？ 大丈夫です。……いいですよ、わざわざ来て
もらわなくても。一人で十分です。いや一人で十分ですよ。(電話が切れてしまう)
……頑固な人だなあ。(二人に) 悪いけど、あんたたち。ちょっと待ってて。

と、教室の電気を消し。

ミウ あら。

宝田 もう、手間なんだよ。

と、慌てて去る。

ミウ ……何よ。面倒なことって。

カノ 休んでいる間に何かあったのかしら。

ミウ カノさあ、調子悪いんだったら、言ってくれなきや。

カノ ごめん。落書き見つけたら、気分が悪くなって。

ミウ 入院してたの？

カノ ずっと家にいたわ。

ミウ 一週間も？

カノ うん。

アマ 繊細な所あるのね。教員してるくせに。

ミウ なんてこと言うのよ。

アマ だって普通の神経でなれる？

ミウ 失礼ね、先生っていったら聖職よ。怪しい女王様じゃないのよ。

アマ 違うって、私は平気でこの学校に通えるところがおかしいって言いたいの。

ミウ どこがおかしいのよ。

アマ 無神経よ、まともじゃない。

ミウ 何よ、校舎もみんな、変わってるじゃない。

アマ 変わるもんか。

ミウ 言ってたじゃない。赤の他人って。

アマ 友だちが殺されたのよ。この学校で。

ミウ ……だからカノは、二度とそんなことがない様になって、この町にとどまっているんじゃない。なのに、どうしてそんな酷いこと言えるの？

アマ だって、私、酷い目にあつたから。いけない？

ミウ いけないね。誰を責めているのよ。

アマ あら、来るんじゃないかった。

カノ ごめんね。

ミウ じゃ、なんで来たりするのよ。

アマ だって、あんたたち、頼りないから。

ミウ ……。

アマ 全然しつかりしてないんだもん。

アマは無意識に自分の額に手をあてている。

カノ でも、見たからには伝えなきゃって思うでしょ。見つけてしまったものはしょうがないじゃない。…でも、そうね、黙っていれば良かったね。

ミウ 大丈夫だよ、アマ。切れてないよ。もう傷なんて消えてなくなってるからね。

カノ どうしたの？ まだ痛むの？

アマ 放つといてよ！

間。

ミウ ……ねえ、この落書きだけどさあ。

カノ もういいよ。この机は取り替えてもらうわ。

ミウ でも、宝田が言つたこと、気にならない？

カノ 気になるって？

ミウ 学校で起こっている面倒なことって、出て来た落書きと関係あるのかな。

バレーボールのユニホームを着た女(多田)が登場。手に小物入れ。

多田 (弱々しく) ……あの、こんばんは。

カノ え？

ミウ どちら様ですか？

多田 あ。…私、ビーナスですが。

ミウ は？

多田 ビーナスの、者です。

ミウ 誰がビーナスだって。

と、電灯を手に持ち、多田の顔を照らす。

多田 ご存じないですよね。

ミウ ご存じもなにも。

多田 ママさんバレーの、松原ビーナスです。週一で体育館お借りしているんですが鍵が閉まっています。誰にも連絡が。…いや、黙って校舎に入るつもりじゃなかったんですよ。…その、宝田選手は？

ミウ 宝田選手？

カノ あ、宝田選手なら、先ほど用務員室に戻られましたよ。

ミウ ン。宝田選手？

多田 高野先生ですか？

カノ こんばんは。

多田 いつも選手が体育館開けてくれるんだけど。

ミウ あの人、選手なの？

カノ 入れ違いになったんですかねえ。選手と。

多田 あ。

ミウ 選手。宝田。

高野の声を聞いたチームメイトの羽賀が入ってくる。

羽賀 高野先生。

カノ あ、羽賀さん。

羽賀 (照れながらカノに近づく) こんばんは。嫌だ、恥ずかしい、こんな格好で。

多田 言いながら、近い近い。

ミウ いやいや、似合ってますよ。皆さんプーマですか？

松原ビーナスのユニホームには、プーマのマークが入っている。

多田・羽賀 (自慢げに) いいでしょう。

多田 (羽賀に) 宝田選手、用務員室だつて。

羽賀 何。入れ違い？

ミウ ね、どうして宝田が選手なの。

羽賀 あの人、私たちが練習始めるとコートに入ってきて、なんと言うか、高めようと
するんです。

ミウ あの人、バレーできるの。

羽賀 それがさっぱりなんですが。

多田、電話を取り出し、操作する。

ミウ 皮肉なのね、選手つて。

羽賀 でも、本人は気付いてくれなくて。

多田 圏外かあ。

羽賀 多田さん、また家の子機持ち出して。いくら近いからって無理でしょ。

多田 でもダーリンが使えなくないつて。

羽賀 もう痛々しい。

多田 羽賀ちゃん、携帯かしてよ。

羽賀 車に置いてあるから。

ミウ 儉約されてるのね。

多田 ……あの、先生の一人ですか？

カノ あ、この人は。

ミウ 友だちなんです。同級生なの。

多田 そうなんだ。え？(カノに) じゃ、ダーリンとも同級生になるんですか。

カノ そうですよ。

ミウ え？

多田 申し遅れました。私、多田蘭と申します。

ミウ あ、小山佳子と申します。

羽賀 (下手の出入り口に向かい) ねえ、舞ちゃん。恥ずかしくて出で
おいでよ。

ミウ 多田。

羽賀の娘、舞子が入って来る。

舞子 先生、こんばんは。

カノ あら、舞ちゃん。

舞子 もう大丈夫なんですか？

カノ うん。ごめんね舞ちゃん。お母さんについて来たの？

舞子 はい。母は一人だと頼りないので。この間も試合のとき、ネットの柱にぶつかって運ばれたんです。

羽賀 張り切っちゃって。つい。

舞子 試合出てもいないのに。

カノ お母さんも大変なのよ。

多田 でも舞ちゃん。お母さんには、お婆さんがついてあげてるでしょ。

舞子 ……。

羽賀 多田さんじゃ無理みたい。

多田 恥ずかしがり屋さんだから、舞ちゃん。

ミウ (カノに) ねえ、多田さんのダーリンって、タダーンのこと？

カノ そうよ。

アマ へー、タダーンなの？

ミウ タダーンの奥さん？

多田 タダーンって……。

ミウ 多田団だからタダーンって呼んでたのよ。元気にしてる？

多田 はい。元気、元気。何ていうか、脈が激しいですね。

ミウ ジジーンっていう奴といつもつるんでいたのよ、ジジーンはどうしてるの？

カノ 木工所で働いてるわ。

ミウ 今も仲いいの？

多田 えっと、神野さんのことですかね。

カノ ええ。

多田 神野さんなら、昔はよく夕飯を一緒に。

アマ あら。今は仲悪いの？

多田 悪いってことはないと思いますよ。たまには会ってるんじゃないですか？

ミウ 木工所って、町の？

カノ ええ。

多田 神野さんは器用な方でねえ。よく余った木材使って、立派なお地藏さん彫ったりするんですよ。

ミウ そうそう。器用だった。

多田 クリスマスには、その地藏を子供にくばるんです。

ミウ クリスマスに地蔵はつらくない？

羽賀 うちには、もう三体ありますね。

アマ それ捨てられないでしょ。

カノ 多田さん、あれは天使なんですよ。

多田 え？ 天使なんですか？

カノ 地蔵じゃないんですよ。よく見ると。

羽賀 ちゃんと見てみます。

アマ 気味悪かったら断れば？

羽賀 でも、子供たちには良くしてもらって。

多田 そうそう、私、みどりのおばさんやってるんですが、先生が休んでいる間、一緒に立ってもらっていたんですよ、学校前の交差点に。

カノ 神野君が、私の代わりに？

多田 先生とは同期だからって、毎朝旗を持って……だったらダーリンがすりゃいいのに。

ミウ 他に同期って誰が残っているの？

多田 ダーリンが飲みに行く店の、平良ちゃんがそうですよね。

ミウ 平良いるんだあ。

羽賀 平良さんの息子さんは、舞子と同じクラスなんですよ。

アマ じゃ、何？ あんた平良の息子教えてるの？

カノ まあ、そういうことになるのよ。

ミウ あれ？

アマ 何よ。

ミウ 平良って、死んでなかったっけ。

多田 え？

アマ 死んでない、死んでない。

多田 お元気ですよ。

カノ なに言ってるのよ。

ミウ もー、怒らなくてもいいでしょ。

アマ (多田に) すみません。この人、天国に住んでいるんです。

多田 天国に？

宝田、戻ってくる。なぜかジャージを着替えている。

宝田 ちよつと、こんな所まで入ってこないですよ。……先生たちもまだいるの？

多田・羽賀 宝田選手！

宝田 ほんと、困るんだから。

ミウ ちよつと待ってよ。

宝田 何だよ。

ミウ あなた、今「まだいるの。」って言ったわよね？ 私たちに「ちよつと待ってろ。」
って言ってなかった？

宝田 へ？ 言ってるよ。

ミウ 言ったのよ。

宝田 言ってるよ。

アマ 言ってるよ！

宝田 ……言ったかもしれないけどよ。……こんちくしょう。

ミウ こんちくしょう？

カノ いいでしょ、もう。

ミウ 選手なんだって？ 何の選手なのよ。

宝田 いいじゃねえか、何の選手だろうが。

ミウ 何で、微妙にいいジャージに着替えてきたのよ。

宝田 着替えてねえよ。

ミウ 着替えてるじゃない。

宝田 ……これは、ちよつと、リバーシブルになってるんだよ。

ミウ ほんとなの？

宝田 ああ。

ミウ じゃ、裏、見せてみなさいよ。

と、宝田のジャージをめくってみようとする。宝田、抵抗するがジャージをめ
くられる。

ミウ 全然、違うじゃない！

宝田 いいだろ！ 全然、関係ないだろ！

ミウ ひと風呂あびてんじゃないわよ。人待たせておいて。

宝田 臭えとか言うからだろ。このやろ。

ミウ ……。

「丈夫な教室」

カノ つつかからないですよ。もう。

ミウ だって「まだいるの？」よ、待たせておいて。

アマ 待ってたわけでもないでしょ。

多田 選手。それ余所行きジャージよね。

ミウ 余所行きってあるの？

宝田 うっせえなあ。

羽賀 張り切っちゃって。

宝田 ……羽賀ちゃん。こっちは校舎でしょ。

羽賀 違うのよ、舞が忘れ物したから入りたいてい出して。用務員室に選手いなか
ったけど、校舎の鍵、開いてたから。

宝田 子供のせいにしてるんじゃないだろうな。

羽賀 しないわよ。

舞子 本当です、国語のノート忘れたんです。中に作文がはさんであって、今夜中にそ
れやらなくっちゃいけないくて。

宝田 本当かい？

ミウ 子供疑うの？

舞子 本当です。ガンジの非暴力主義の思想にふれたものです。

と、手さげ袋からノートを取り出し見せる。

カノ コンクールのときに読んでもらう作文ね。

舞子 先生との約束、明日なんですが。

カノ うん。先生、明日から来るから、読ませてね。

ミウ 作文読んだりするの、まだ続いているんだ。

羽賀 今年は舞子が代表で読む予定なんです。

宝田 偉いんだなあ、ガンジーさんかよ。

舞子 彼の半生についてです。

羽賀 どれどれ。

舞子 やめてお母さん。

羽賀 (舞子から作文を奪い、得意げに読む) 「彼は青年時代、強靱な精神を得るため
に、たゆまぬ努力をしました。毎晩、裸の女たちに囲まれながらも……懸命に。
……眠ったのです。」

カノ そんなこと調べたの？

アマ 本当の話？

舞子 男子がネットで。

宝田 厳しいことチャレンジしたんだな。

ミウ (カノに) 裸の下りは、どうかなあ。

舞子 これだけではありませんが。

宝田 ねえ、舞ちゃん。おじさんに、ちよつと先、読ませてくれないかなあ。……な、ちよつとでいいからさ。

舞子 ……。

宝田 黙っちゃったよ。

ミウ 黙らせたんじゃない。

多田 それで、このノート持って帰ろうとした時に、音楽室から先生たちの声が聞こえたのよ。

羽賀 黙って入ったのは悪かったけど、選手いなかったから。

宝田 もう言い訳はいいから、とつと帰ってくれるかい。そもそも体育館の貸し出しは今週から断ってるだろ。

羽賀 聞いてないわ。

多田・羽賀 聞いてない、聞いてない。

宝田 他のメンバー来てないのに気付けよ。大体二人でバレーできないだろ。

多田 出来るわ！

羽賀 私がトス。

多田 私がアタック。

宝田 誰がレシーブするんだよ。

多田・羽賀 それは、宝田選手。

宝田 ……なんだよ、それ。どうして揃うんだよ。練習の間も、ずっとぶざけてるから怪我なんかするんだよ。

多田 ウチら補欠だからさ、やることないんだもん。

多田のユニホームの背番号は2億と書いてある。羽賀は十六番。

宝田 こんな時間まで待ってておかしいと思わなかったのか？ 他の連中は町民体育

館で練習して帰ってるんじゃないの？

多田 (羽賀に) 私たち、みんなに愛されていないのよ。

羽賀 きつと今頃、ガストでミーティングしてるよ。

多田 (子機を取り出し) エースに連絡とってみる。

羽賀 だから、それかからないって。

宝田 お前、また子機もってきてんのかよ。

多田 だから、家近いから。

舞子 ……お母さん、恥ずかしいからもう帰ろうよ。宿題もあるし。

多田 舞ちゃん、恥ずかしいって。おばさんと一緒だから？

舞子 ……。
多田 黙っちゃったわ。
宝田 黙らせたんだろ。
羽賀 ……そうね、帰りましようか。
舞子 うん。

羽賀、舞子、帰ろうとするが。

多田 選手さあ、体育館って、なんで使えないの？
羽賀 そうよ、どうして？

宝田 戸締まりにうるさくなっただよ。宿直にしてもさ、この学校、機械警備っての？
セコムしてねえから、俺と若い先生たちで順繰りに任せられているんだ。(ミウたちに)さっきの呼び出しも真面目な先生からだよ。きつと双眼鏡なんかで見張ってるんだ。この春入った新任のクセに。

ミウ そうなんだ。

多田 真面目過ぎても怖いよね。

宝田 俺のパンツ姿も見られてるよ。

ミウ 見てどうするの。

宝田 ちよつと電気つくだけで、速攻電話かかってくるんだ。何もそこまでやんねえでも。

カノ 誰なんです？ 若い先生って。

宝田 察しつくだろ。

カノ 松尾先生？

宝田 松尾なわけねえよ。日吉先生だよ。

カノ ああ、彼女ですか。

ミウ 日吉？

カノ 日吉美智子。

ミウ みっちゃん？

カノ そうよ。

アマ ん？

ミウ 直子の妹。忘れた？

アマ 直子の妹、先生になっただ。

カノ この春、入ってきたのよ。とてもしっかりしてるの。

宝田 何がしっかりだ。あそこまでいくとアウトだよ。

ミウ アウトって何よ。

宝田 厳しすぎるんだよ。この間も、生徒殴ったの見たよ。それも尋常じゃねえし。

多田 叩いちやうの？

宝田 殴るんだよ。

多田 まあ。

宝田 厳しさじゃないな。ありや、はけ口だよ。

カノ そんなことありません、彼女なりに理由があるはずですよ。

羽賀 舞ちゃん、そうなの？

舞子 でも、叩かれる子って、叩かれるようなことしてるもん。

羽賀 本当に？

多田 そうよ。しつけはちゃんとしてもらわないと。

宝田 度が過ぎてるよ。皆、黙認してるんだらうけど。……先生、見たことないの？

カノ ええ。

ミウ サドなのよ、きつと。

カノ 何てこと言うのよ。

ミウ いや、教師って人間は、大概（アマに）ねえ。

アマ 大人しい子だったのに。

ミウ 何、違うの？

宝田 長続きしない気がするなあ。目いっちゃってるもん。あそこまでいくと逆に辛い

んじやないの……。

カノ 私が見る限り、問題ないと思うんですが。

宝田 ……まあ、そういう先生もいてだな。そう言うことだ。

多田 は？

宝田 学校側が戸締まりにうるさくなった。体育館の貸し出しも断ってる。以上。

カノ いつからなんですか？

宝田 先生がぶっ倒れた後だよ。

カノ 私、何も聞かされてないんです。

宝田 心配かけたくなかったんじゃないの？

ミウ あのさ、私たちに言ってたことって、この戸締り云々に関係あるの。

宝田 は？ 何の話だよ。

ミウ 面倒なことが起こってるって言ってたじゃない。

羽賀 面倒なこと？

宝田 まあ、学校側はこのご時世だから、公にしようかしまいか迷っていると思うんだらうけどさ。

ミウ 何よ。

宝田 変な噂が出回ってるらしいんだよ。子供たちの間で。

カノ 子供たちが。

ミウ どんな噂よ。

宝田 ……もういいだろ。

ミウ 教えてよ。ここまで言っというて。

宝田 学校の周りに、怪しい男が出るんだって。

ミウ 怪しい男？

カノ それは、どんな風な。

宝田 それが詳しい事になると先生たちが、渋ってさ。

アマ 何よ、もったいぶらずに言っよ。

宝田 聞きたいのは俺の方だよ。…でも、全部デマだと思うよ、あんたたちがハサミ男だとかなんとか言っって、思ったんだけどさ、子供たちの間で、その手の噂話なんかしよっちゅうあるだろ。俺たちの時にも。

ミウ 俺たちって、一括りにしないでよ。

宝田 美人ちゃんでマスクしてる。そう口裂け女だ。いもしないのに騒いだじゃねえか。

カノ でも宝田さん、ハサミ男は噂話じゃないんです。本当にいたんです。

宝田 先生はもう少し、休んでた方がよさそうだな。

舞子 ……ねえ、先生。見たことあるの？

カノ 何？ 舞ちゃん。

舞子 ハサミ男。見たことあるの？ 子供にしか見えないんだよ。

アマ 何言ってるの、舞ちゃん。

舞子 ……みんな、ハサミ男を見たって言ってるの。

カノ 本当なの？

舞子 でも、舞は見たことない。…でも、みんなは見たって。ハサミを持って笑ってるって…。でも、怖いからハサミ男のことはあんまり話しちゃいけないの。話しているところを見られたら、二度と喋れないようにハサミで喉を切られちゃうんだって。

カノ 誰が言ってるの？

舞子 みんなが。

宝田 でもね、舞ちゃん。ほんとに喉切られた友だちがいるの？

舞子 ……。

宝田 な、言わんこっちゃない。デマだよ、子供の。なんだそれ、子供にしか見えないって。

羽賀 いい加減なこと信じちゃいけないの。

舞子 平良君が、ハサミ男見てから学校休んでる。

ミウ 平良君って。あの平良の？

舞子 ……。

カノ ね。本当なの？

舞子 先生は、休んで知らないと思いますが、お見舞いに行ったら、怖いからって。

多田 そういや、その子、見ないわ。

羽賀 そうなの。

多田 みどりのおばさんやってるから。……毎朝元気に挨拶してたのに。

ミウ ねえ、本当に出たんじゃらないの？ あの男が。又うろついているのよ、刑務所から出てきて。

羽賀 刑務所？ 何の話ですか。

アマ 何言ってるのよ、あの男、死んでるじゃない。

ミウ え？ 何それ。

アマ 知らなかったの？

ミウ そうなの？ ……何よ、そんなの言ってくれなくちゃ。

カノ 皆が町から出て行ったあと。随分経ってからだけ。

ミウ え。じゃ、どうして現れるのよ。

カノ きつと何かの間違いだつて。

ミウ ハサミ男は、私たちしか知らないはずなのに。

間。

多田 ねえ、ダーリンと同級生つて言ってたけど。その時にもいたの？

ミウ ええ。

多田 そうなんだ。

ミウ タダーンも一緒に。

羽賀 ねえ、教えてくれない。どんなことがあったのか。町の人も、口つぐんじやつて。

多田 詳しく知らないのよ。

多田 やめとこうよ羽賀ちゃん。

羽賀 いいじゃない、この際だから。

多田 聞くもんじゃないつて、そういうことは。うちのダーリン、その事件のことは一切口にしないんだから。

ミウ タダーンが？

多田 私も、彼女と同じ、よそ者です。主人とは職場結婚なんです。で、この町に越してきて。主人の過去に起こった事も随分後になって知りました。あれは、結婚してしばらくした頃に起きたんですが、ダーリン、夜中に目を覚まして泣くんですよ。ビツクリしました。いつも子供の様にあやすんですが泣き止まないんです。本人も自覚があつたりなかったりで、私、不安になつてご両親に聞いたところ、昔そんな事件があつたつて。ダーリンに「怖かつたんじゃないの？ でも良かったね、助かってさ。」つて、そのことを訊ねると。キレるつていうんですか？ いや、そこまではいかなかなあ、怒った様に黙り込むんです。……事件の事は一切口に出しません。……それはもう、よつぽどの事だつたんだと思います。あの人は、私の夫ですから、全てを知

りたいという思いはあります。でも、私の都合だけで聞いちゃいけない深い心の傷なんだと思ってます。……だからさ、羽賀ちゃん。

羽賀 (うなずきながら) ごめんね。……でも、興味本位で聞く訳じゃないのよ、私もこの学校に通う子供を持つ母親なのよ、この子の為を思っ知っておかなきゃいけないじゃないの。

多田 相当なんだって。ハサミ持ってる人いても、顔色変わるんだから。

羽賀 どういうことなの、それ。

ミウ 美容師さんとか？

多田 いえ。この町、木工所多いじゃないですか。

羽賀 木工所？ ハサミでしょ？

多田 皮をめくったりする時に使うそうなんです。この前も怒らしちゃったんですよ。ちよつと気になったことがあって、つい話しちゃったもんだから。

ミウ タダーンまともに生活できてるの？

多田 普段は、全然問題ないんですけど。

羽賀 あのね、ご主人だけよ、そんなおかしい人。聞いちゃいけないの？

多田 被害にあった人からしちや冗談じゃないんだから。

羽賀 でも、事態が事態でしょ。そういう人には我慢してもらわなきゃ。

宝田 もう黙ってるよ、教えなきゃいけない時に言っやるよ。

羽賀 宝田選手、知ってるの？

カノ ……知らないと思います。

羽賀 何なのよ。

アマ あんたみたいなのはね、ワイドショーで、人の不幸みて楽しんでいけばいいのよ。

羽賀 え？

アマ 出たってよ。わかるわけないから。なにを言っても。

ミウ アマ。

羽賀 あなたね、そんな言い方ないんじゃないの？ 何様のつもりなのよ。

アマ 帰れって言ってるでしょ！

アマ、羽賀につつかかる。

羽賀 何よ。人には知る権利ってものがあるでしょう。

アマ 知る権利？ なんだそれ、どんなドラマ見て覚えたんだ？ 笑わせるんじゃないわよ。

羽賀 は？

ミウ すいません。私たち、もちろん被害者なんです。だからって、そんな、えらそうにするつもりなんかありません。

「丈夫な教室」

羽賀 (ミウに) あんたはいいのよ。

多田 しょうがないんだよ、辛い目にあっただから。

羽賀 だからって、何でも言っているの？

多田 落ち着きなさいよ、みっともないんだから。

羽賀 (多田に) あんたも何よ。

舞子 おかあさん、もうやめてよ。

羽賀 (アマに) 謝んなさいよ！

舞子 やめてっつて！

羽賀 ……。

舞子 恥ずかしいよ、お母さん！ (多田に) ……おばさんも、ごめんなさい。

多田 いいのよ、私は。

舞子 ……いつか、タダーン、話してくれるよね。

アマ ……知らなくっていいんだ！

カノ アマ！

アマ 知ってどうすんのよ！ あくる日にや井戸端会議で食い散らかすんだろ！

ミウ 落ち着いて！

アマ 出てけよ！ みんなとつとと出てけ！

アマ、側にあつたカノの鞆を羽賀に投げつけ、つかみかかる。

宝田 やめるよ、おい！

羽賀、必死でアマから逃げる。

舞子 お母さん！

カノ アマ！

カノ、アマと羽賀の間に割って入り、アマを押さえる。

教室の机が、暴れる大人達によってざわめく。

宝田 ここは教室なんだよ！

アマ、カノに押さえつけられて止まる。

宝田 ここは教室なんだ。……大人が暴れ回るところじゃねえ。

アマ ……じゃ、私が出て行く。

アマ、教室から去る。カノ、乱れた机を直し、アマを追う。
間。

ミウ、椅子に座り、窓をぼんやりと眺めて。

ミウ ……その男は、ずっとこの町に住んでいた男でした。名前は忘れませんでした。でも、近所でよく見かけていました。向こうも、こっちを見ていたのかもしれない。私たちが学校に通ったり、大人たちが仕事に出かけているのに、その人は、朝から晩まで何をしているんだろう。そんなことを思わせる人でした。……私たちは知ってたんです、その男のことを。……大人たちもわかっていたんだと思います。でも、私たちが酷い目に合わせる人とは思っていませんでした。……季節はちやうど、今くらい。校庭に向けた窓を開けると、心地よい風が入ってくる日のことでした。放課後、コンクールに向けた合唱の練習を音楽室で終えて、皆で帰ろうとしていたとき、後ろの扉の方から悲鳴が聞こえたのです。その声は先生の声でした。すぐに扉が開いたのでわかったんです。……その男は大きなハサミを持っていました。先生は男を止められなかったようです。先生のブラウスには、たくさん先生の血がついていました。男は、どうしてそんなに私たちを憎んでいるんだろうという目をしていました。……私は、この人を怒らせる何か悪いことをしてしまったのかと一瞬考えましたが、何も思い当たりませんでした。扉の近くにいた友だちの何人かが、男に襲われました。タダーンもその中にいました。ある子は何度も刺されて動かなくなりました。倒れたその子からは血が溢れ出しました。でも、誰も手当てする余裕なんてありません。男の先生が一人、なんとか取り押さえようとして、椅子を投げたりしましたが、男は逆上して、先生を刺しました。刺された先生は助けを呼びに行きました。……その時、男と目が合いました。私と直子は逃げました。次は私たちがやられると思ったからです。大人の人は、足が速いと思いました。直子が突き飛ばされるような感じで、背中を何度も刺されてから、動かなくなりました。……私は、あまりにも怖くなって、動けなくなりました。男は私をめぐめて物凄い勢いでハサミを突き刺してきましたが、偶然、アマにもたされていたランドセルにハサミが突き刺さりました。私の名前を叫ぶ悲鳴が聞こえ、誰かに背中を強く引っ張られました。男は、私が持つランドセルからハサミを引き抜くと、今度は倒れていた私ではなく、私の後ろにいたアマを刺しました。彼女は動けなくなった私を抱え、必死で逃げようとしてくれていたんです。……私の代わりに、アマの額が裂けてしまいました。アマは倒れてしまいました。……やっつと、男の先生が何人か駆けつけ、男を押さえつけました。アマを抱き起こすと、彼女は血を流し、気を失っていました。……私は、アマの額から少しでも血が溢れ出ない様に、彼女の傷を押さえ続けました。……カノは涙も出せず、直子をさすっていましたが、血が流れるだけで、何もできなくなりました。ワックスをかけた床一面に。……ここは

一体、何処なんだろうと思いました。白い服を着た大人達が慌ただしく入ってきて、直子を連れて行くまで、とても時間が長く感じました。

羽賀 ……ごめんなさいね、私。

ミウ 私たちが子供の頃、こんなことがあったんです。私は無傷だったし、それに比較的冷静だったので、あとで刑事さんにいろいろ聞かれました。だから、あんまり人に話すのは苦ではありません。……アマは、今では殆ど治っていますが、額に深い傷痕があつて、ずっと気にしているようです。

ミチコ、ミウの話聞きながら、音楽室に入ってくる。

アマ、廊下で一人。

アマ あのととき、私は、直子と一緒に殺されたんじゃないかって、よく思う。そうすれば、全ての辻褄が合うような気がして。……あれから全ての大人、特に男を信じることができない。町を離れて、中学、高校、大学に入り、まじな仕事についた。今ではその男たちと張り合っている。数で争う世界は全てが割り切れ、性に合っていると聞いた。……でも時間は、実感なく過ぎていく。この傷と、私を置きざりにしたまま。

アマ、傷痕に手をあてる。

ミチコ、「野ばら」を奏でる。

カノ、ミチコに気付き、教室の電気を点ける。
アマ、ピアノの音色に気付き、教室に戻ってくる。

ミチコ ……姉の話を読んでいたの。

カノ 日吉先生。

ミウ ……みっちゃん。

ミチコ 三浦さんですよ。

ミウ ええ、そうよ。今は、小山さんだけ。

ミチコ 天野さん。

アマ ……。

ミチコ お久しぶりです。直子の妹のミチコです。まだ新米ですが、この学校の教員を
しています。(カノに) お体の具合は、よろしいんですか。

カノ ええ、ご心配をおかけして。うちのクラスもみていただいているようで。

ミチコ いえ、私でよければ。

ミウ 立派になられて。

ミチコ 何しにいらしたんですか？ こんな時間に。

カノ すみません。私が、この人たちを教室に。

ミチコ 私がよく解っていないのかもしれませんが、この学校では、こういうことが許
されているんですか。

カノ いえ、もちろん。いけないことです。でも、気になることがあつて。

ミチコ 気になること？

カノ ええ。

ミチコ 机の落書きですか？

カノ え？

ミチコ 誰でも気になります。おかしいんですよ。私からも注意しているんですが、酷
いもので。

と、カノたちが調べた机とは別の机をみる。

カノ え？

ミウ どうしたのよ。

「丈夫な教室」

「ハサミ男、死ぬ」の落書きは他の机にも書かれてあった。

ミウ あれ。こっちの机にも書かれてるじゃない。

多田 ハサミ男って書いてある。

アマ あんた気付かなかったの？

ミウ 一緒に探したでしょ。

カノ どうして、こんなに。

ミチコ、教室の机を一つ一つ眺め。

ミチコ 増え続けてるんです。中でも酷いのが、これで。

と、三人が刻んだ落書きのある机を指す。

ミウ ……でもさ、こっちは。字が違う。

カノ (ミチコに) 私は、その机の落書きを見つけていたんですが。

ミチコ 私が赴任した頃にはあつたんじゃないですか。

カノ そんな前から。

ミチコ 困ったものです。子供たちの間で伝染しているというか、増え続けて……。

舞子 ……。

舞子、ミチコの視線を避ける様に小さくなる。

宝田 困りますよ。音楽室の机は、先生が言ってくれなきや気づきませんからね。

ミチコ 宝田さん。校舎の鍵、又あけっぱなしでしたよ。

宝田 ……あれ？ おかしいですね。すぐに戸締まりを。

ミチコ もう閉めておきました。

宝田 あ、すいませんねえ。

ミチコ これで何回目なんですか。

宝田 はい。

ミチコ なんの為に詰めているんですか？ 始末書かいていただきますよ。

宝田 そうですね。

ミチコ 仕事なんですから。

宝田 はい。

ミチコ 何度もいいますが……。

宝田 反省してます。

ミチコ 宿直室のテレビ。つけっぱなしでしたよ。

宝田 もう、本当、手間とらせますねえ。

ミチコ 消してませんよ。散らかってる部屋に入るの嫌でしたから。

宝田 ……。

ミチコ なんでゲームの画面になっっているんですか。

宝田 ゲームしてたら、ゲームの画面でしょ。

ミチコ 信じられません。消しに行ってください。

宝田 (多田と羽賀に) ……じゃ、帰ろうか。

ミチコ いらしたのは、こちらの方だけですか？

エース。ユニフォーム姿で駆け込んでくる。

エース あら。良かったあ、無事で。

ミチコ 誰ですか？

羽賀・多田 あ！ エース。

宝田 困るよ！ もう入って来ないでって。

ミウ 新手のプーマが。

ミチコ 校舎の鍵、閉まってませんでした？

エース ええ、もちろん。

ミチコ じゃ、どうやって。

エース だって鍵の場所、宝田さんから教わってるから。

宝田 しっ！

ミチコ (宝田に) 本当なんですか？

エース 受け渡しに面倒だからって。ダメなの？

宝田 しっ！ しっ！

ミチコ 宝田さん！

宝田 ママちゃんだけなんですよ。……ほんとに。

と、うなだれる。

多田 (エースに) すみません。球拾いできなくて。

エース 今週から町民体育館でしょ。

羽賀 やっぱ、そうなんですか？

エース 練習終わって、ガストでミーティングしたら、多田さんのご主人から帰って

来ないって連絡入って。

多田 やっぱ、ガストでお茶してたんだ。

羽賀 どっちみち、誘われないけどね。
多田 主人に電話します。(子機を取り出し)

エース、携帯電話を取り出し、操作する。

羽賀 だからそれじゃ無理だって。

エース いいです。私、かけますから。

多田 ……すみません。

羽賀 多田さんのご主人、相当心配してるわよ。

エース (携帯電話に) あ。多田さん？ 奥さん見つかりましたよ。

多田 すみません。変わります。

エース (携帯電話に) はい、小学校に。…え。向かってますか。

羽賀 こっち来るんだ。

多田 (携帯電話を受け取り) ……あ。もう切れちゃった。

カノ せっかちなんだから。

アマ 心配なんですよ。

エース 選手さん。知ってたらさ、さっさと教えてあげなさいよ。

宝田 言ってたよ。ずっと。

エース さ、もう帰りましょう。

多田 はい。

羽賀 (立ち止まり、ミウに) ……あの、ごめんね、辛い事があったっていうのに。

ミウ いえ、いいんです。

羽賀 (アマに) その人にも謝んなきゃ。

ミウ ああ。

カノ アマ。

アマ すぐ手の平返すんだよなあ。あんたみたいな部類は。

ミウ もう、黙って聞いてあげてよ。

アマ 謝るくらいなら、最初からムキになるんじゃないわよ。

ミウ もう、黙って。

羽賀 ……いいんです。もう、私、嫌われたみたいですから。

エース あの、ウチの部員が何か？

ミウ いいのよ、エース。

タダーン、凄いい勢いで駆け込んでくる。

タダーン お邪魔するよ！ してるよ！

松尾、タダーンのすぐ後から息を切らして入ってくる。

タダーン (多田を発見し) 何時だと思っているんだ。

多田 ダーリン!

宝田 (タダーンに) 多田さん、困るよ!

アマ タダーン?

タダーン こんな遅くに失礼! でも無理矢理じゃありません。松尾先生に案内してもらった。問題ないね、ミッチー!

松尾 (息を切らし) 強引なんだから。

ミチコ 松尾先生、何やってるの。

松尾 だって、この人、家まで来るんだもん。

と、くたびれて椅子に座る。

タダーン 心配してたんだぞっ!

多田 ごめ〜ん。

タダーン 外じゃ、携帯だろう。

と、携帯を多田に渡す。

ミウ (タダーンを見て) タダーン?

タダーン すまなかったね。エース。

エース いつものことよ。

ミウ (カノに) タダーン?

カノ そうよ。

タダーン パトカーまわしてあるんで、送るから。

エース いや、車で来てるから。

ミウ (タダーンに) タダーン!

タダーン なんだ気になるよ。誰、タダーンって呼ぶのは、ミウ!

ミウ 久しぶりね。

タダーン ミウ。

ミウ 警官になったの?

タダーン 夜明けの、ミウ。

ミウ 遠い記憶を引き出すよね。

タダーン じゃ、天野かい?

アマ ジャって何よ。

タダーン カノ！

カノ いつも会ってるでしょ。

タダーン ……うん。

ミチコ 多田さん、いくら学校だからって。こんな時間に同窓会始めないでください。

タダーン はい、失礼しました。

ミチコ 困りますよ。大体、勤務中じゃないんですか？

タダーン ま。家内を捜索中で。

松尾 何いってんだか。

ミチコ じゃ、見つかりましたね。任務に戻られたら。

タダーン うん、そうだね。

多田 すみませんでした。

タダーン あの、ミッチー。

ミチコ まだ何か？

タダーン やっぱり、君。直子ちゃんそっくりだね。

ミチコ は？

タダーン いや、こうやって皆で並んでみると。アルバムの写真みたいな。

ミチコ そうですか。

タダーン あ。気、悪くしちゃった？

ミチコ いえ、両親にも言われますから。

タダーン ああ、そうなんだ…。

ミウ ねえ、みっちゃん。元気にしてる？ お家の方。

タダーン あの、ミウさ。

ミチコ 元気ですよ。訳あって別居してますが。

ミウ あら、ごめんなさい。

ミチコ 妙に信心深いところがあって、離婚はしないみたいです。

アマ ……そうなの。

ミチコ クリスチャンも度が過ぎると、救われませんね。

タダーン ところで皆、俺を差し置いて、こんな時間に何やってんの？

カノ 別に、集まりたいわけじゃなくて。

タダーン ねえ、いつまでいるの？

アマ もう出るわ。私、仕事残っているから。

タダーン 俺も勤務中だって。

アマ だったら戻りなさいよ。警官なんでしょ！

タダーン でも俺たち、ろくすっぽ同窓会やってないから、もったいなくない？（多田の携帯を奪う）ごめん、携帯返して。

多田 え、何するの。

タダーン、素早くメールを打っている。

タダーン 皆に知らせようと思って。

アマ 全然嬉しくないから。

タダーン 平良が店やってるから。忙しいのかな。

ミウ 信じられん。

タダーンの携帯電話に着信音が鳴る。

タダーン とつとと〜！（電話に出る）俺だ、俺だ、俺だ。なんだよ、いきなり携帯に。（制服の肩の辺りを探り）……おっと、無線は車に置きっぱだった。

ミウ 大丈夫か、町の治安。

タダーン ……そうか。派出所の者は、向かってるのか？……何、動けない？ 下痢で腹が痛いって？ 何やってる、俺にかまわず……。向かってるのか。よし、とにかく到着したら外と内、二手に分かれておけ。

カノ 何があったのよ。

タダーン 侵入の形跡と犯人の出があったかを確認しろ。俺もすぐ向かう。

一同、タダーンの電話に戸惑いを感じる。

タダーン （携帯電話を切ろうとするが）……あ、すまん、すまん。現場なんだが……切るなよ。（多田に）とりあえず、パトカーに戻って連絡する。

と、携帯電話を切る。

多田 ダーリン。

タダーン 侵入警報だ、不審者の目撃があった。

多田 どこで？

タダーン 近くだ。車の無線で確認する。

多田 うん。

アマ 不審者って？

タダーン とりあえず、俺の携帯持ってる！

と、再び多田に携帯電話を渡す。

多田 ダーリン、気をつけてね。
タダーン あ、いかん。

と、渡した携帯電話を奪い、慎重にメールを送信する。

タダーン ……平良へのメール。
アマ いいでしょ、もう。

タダーン じゃ、絶対帰ってくるからな。

宝田 おい。又、戻って来るつもりか？

ミチコ それ困ります。

多田 私、待ってる。

宝田 だから、待つんじゃないって。

タダーン (エースと羽賀に) あなた方も、お送りしますからね。

エース だから車で来たって。

タダーン、出ていくが。教室に戻ってくる。

タダーン 出口がわからん。松尾君！ 玄関まで案内してくれたまえ！

松尾 (引っ張られ) わかりましたよ！

宝田 しっかりしなよ。卒業生だろ？

ミウ 無理ないわよ。変わっちゃってるもん、ここの校舎。

タダーン、松尾、退場する。

宝田 にしても、あれで警部補かよ？

多田 悪かったわね。

ミウ (アマに) 侵入警報って言ってたけど。

アマ さあ。

多田 不審者を誰かが目撃して、通報したんだと思います。

ミウ ぶっそうね。

多田 滅多に無いんですが。

アマ でも、私たちも建造物侵入よ。

ミウ (アマに) え？ そうなの？

ミチコ もちろんです。

舞子 ……お母さん、もう帰ろうよ。

羽賀 ええ。

エース でも、うかつに外に出られくない？

多田 どうして？

エース 変な人がいるんでしょ。

羽賀 ハサミ男が出たとか。

カノ よしててくださいよ。

舞子 大丈夫よ、お母さん。ハサミ男は子どもにしか見えないのよ。

羽賀 だからって。

エース 何、その。ハサミ男って。

アマ そうやって、すぐ騒ぐのね。

エース 聞いただけじゃない。

アマ ただのコソ泥だって。ごっちゃにしないでよ。

カノ ……にしても、近くじゃなきゃいいんだけど。

多田 (携帯電話を持ち) ……私、主人に詳しいこと、聞いてみます。

アマ それ、旦那の携帯でしょ。

多田 あ、じゃ、署に直接。(携帯電話をかける)

アマ 大丈夫かねえ、この夫婦。

ミウ でも、旦那が警察って、こんな時、便利ね。

アマ ちゃんとしていければの話よ。

多田 (携帯電話に) あ、私よ、多田蘭。君、那須君？ あの、ごめん、那須君じゃな

くて警らの藤堂君呼んで、いいから……。

ミウ なんか態度でかい。

宝田 だって、多田ちゃん、元警官だから。

ミウ え。マジで？

羽賀 県警勤務だったのよ。

ミウ 嘘。……あ。

カノ タダーンと職場結婚だって言ってたでしょ。

アマ そういうこと？

多田 (携帯に) 侵入警報出たって？ 現場どこよ。

ミウ どうする？ 万一のこと考えると、ここにいた方が得策じゃない？

宝田 まあ、学校っていうのは緊急の避難場所だからな。

ミチコ 宝田さんが、戸締まりできればの話ですが。

宝田 すみませんね。

羽賀 舞ちゃん、我慢できる？

舞子 うん。

アマ 私は、すぐにでも出て行きたいんだけど。

カノ ねえ。ずっと、気になってたことがあったんだけど。
ミウ 何よ。

カノ 私が職員室へ懐中電灯とりに行ってる間、ミウたち、おじさんに挨拶したって言うってなかったっけ？

ミウ え？

カノ 私、てっきり宝田さんと会ってたと思ってたんだけど、違ってたのよね。

ミウ ああ。でも、大人しい人だったわよ。

宝田 誰がいたんだよ。

ミウ 知らないわよ。

宝田 知らないわよじゃねえよ、それ、大問題だよ。

アマ あんたが開けっ放しにしてるからでしょ。

宝田 それも問題なんだけども。

ミチコ あの、宝田さん。いい加減、テレビ消しに行ってくれませんか？

宝田 なんだよ、もう。ちょうど、今、消しに行こうと思っていたんだよ。

エース とつとと行きなさいよ。

宝田 わかったよ！ じゃ、ついでに俺が様子見に行つてやるよ。って言うかさあ。

全員一緒に固まって帰りや怖くねえんじゃないの。

アマ その通りよ。

宝田 お、気が合うねえ。

アマ あなたといるのも耐えられないから。

宝田 いちいちくつとくるなあ。

アマ さあ、もう出ましようよ。

カノ ええ。

ところが、全員、動けない。

アマ もう、どうなのよ。

多田 ……わかった、ありがとう。(携帯を切る)

羽賀 多田ちゃん、何て？

多田 ダーリン、大急ぎで引き返してるわ。

羽賀 は？

宝田 また携帯でも取りに戻ってくるのか？

多田 じゃなくて。

タダーン、凄い勢いで入ってくる。

後から松尾がついてきた。

「丈夫な教室」

タダーン
そうだ。
君たち、この場で、大人しくしてくれ。……不審者が学校に入り込んでいる

カノ・・・どういふ事なの？

タダーン ご近所からの通報だ。怪しい男が入るところを目撃したそうさ。

ミウ 宝田じゃなくて？

宝田 どうして俺なんだよ。

エース 学校だったの？

多田 パソコン泥棒かも。

アマ いるの？ そんな人。

松尾 よくハードディスクなんか盗られるみたいですよ。

宝田 誰だ、通報した奴って。

松尾 知りませんよ。

タダーン (無線を取り出し) 多田だ。今、南側の音楽室にいる。関係者が大勢いるが、怪しい人物はいない。

ミウ お。カッコいいじゃない。

タダーン (無線に) 岩木は職員室から侵入形跡を見て行け、残りの二人は周りを固めろ。

アマ ちょっと大げさすぎない？

多田 こういうものなんです、落ち着いてください。

アマ 落ち着くも何も。

多田 校舎のどこに？

タダーン それはわからん。校舎の裏から捜してみないと。

ミウ あのさ、タダーン。私たち、今夜、見知らぬ男と遭遇してたんだけど。

タダーン どこで？

ミウ この教室で。

タダーン 音楽室で？

カノ この二人が、宝田さん以外、会う人なんていないはずなのに。

タダーン そうなの？

ミウ うん。

タダーン ……その男の、特徴は？

ミウ (椅子に座り) ……おっさんです。

タダーン (椅子に座り、向き合う) ……中年男性ね。

ミウ 普通のおっさんでした。

タダーン 服装は？

ミウ ジャージ。プーマ、だったっけ。

タダーン おっさんで、プーマ。

宝田 ……俺のことじゃないか。

ミウ 宝田じゃないの。

タダーン (周りを見渡し) なんだ。どうして、プーマがこんなに。

エース いいじゃない、プーマで。

アマ ……待ってよ、ジャージじゃなかったでしょ。

ミウ え、違ったっけ。

アマ ジャージじゃなくって、作業着。

ミウ え？

アマ グレーの、つなぎ？ 着てなかったっけ。

ミウ あ、ごめん。そんなんだった。

タダーン 遭遇は？ 何時頃？

ミウ 何時だったっけ。

アマ えっと、カノに置いてけぼりにされた後だから、9時前じゃない？

タダーン 9時前。

カノ 何よ。

タダーン 服装からして、通報された奴かもしれない。

エース え。

宝田 マジかよ。

ミウ あの人、そうだったの。

タダーン (宝田に) ご存知ないですか？

宝田 知らねえな。

ミチコ ゲームされてたんでしょ。

多田 こんなこともあるんだから。

宝田 なんだよ、うるせえなあ。

松尾 宝田さん、注意する身にもなってよ。

宝田 でもさあ、そもそも、宿直なんて、なんでさせるんだよ。

ミチコ 今は特別なんです。

宝田 わかってんだけどさあ。事情も知らされずにやってるからモチベーション上がんねえんだよ。

カノ 松尾先生、どうして宝田さんと情報共有しないんですか。

松尾 この人に事情話すと漏れるからって、会議で。

宝田 失礼だなあ、若造。

松尾 (かまわず) なんですか。

多田 ちよつと、喧嘩してないで。

タダーン ……一体、なんの事だい？

宝田 あんたにや、関係なんだよ。

タダーン (ミチコに) 宿直の件だよ。

ミチコ いえ、あくまで、こちらの事情で。

タダーン どんな事情？

ミチコ それが……。

松尾 日吉先生。

タダーン 聞かせてもらおうか、ミチコちゃん。

ミチコ あくまで、子供たちの噂なんです。はっきりと目撃者がいた訳じゃないので。

タダーン かまわないよ、言ってくれ。

ミチコ 怪しい男が徘徊してらって。

タダーン いつから？

ミチコ ここ一週間程です。

タダーン 困るよ。どうして連絡してこない。

ミチコ すみません。

松尾 ですが、全くのデマと言っているほど目撃されてないんです。我々教師がこの一

週間、探し回ったのに。……根拠も無いのに、子供たちの噂だけでお騒がせするのは

いかがなものかと。

タダーン 高野、そうなのか？

カノ それが、私の休んでいる間のことで。

タダーン (ミチコに) 何か起こってからじゃ遅いんだよ。

ミチコ すみません。

タダーン しょうがない。で、どんな奴を見たって言ってるの？ 子供たちは。

カノ それが……。

タダーン 舞ちゃんは？ 知ってるの？

舞子 私は見たことない。みんなが言ってるだけなんです。

タダーン お友だちが？

舞子 うん。

タダーン それは、どんな男だい？

舞子 ……。

多田 ダーリン、これは子供たちの噂だからね。……驚かないで。

タダーン 何だ、お前も。知ってるんだったら、はっきり言ってくれ。

多田 ……。

アマ ハサミ男を見たんだって。

タダーン ……。

アマ 出たんだってさ。ハサミを持った男がうろついてるんだって。

タダーン 冗談だろ。

アマ ね。どういう事なのよ。

タダーン あいつは死刑になってるんだ。……それも随分前に。被害者の皆には伝わってるだろ？

アマ じゃ、どうして噂が流れているのよ。ハサミ男を見た子供が怯えてるらしいじゃないの。

タダーン 本当なのか？

アマ (ミチコに) ねえ、そうなんですよ？

ミチコ 誰が言ってるんですか？

ミウ 知らないの？

カノ 平良君だそうです。

ミチコ その子は休んでますが、なにも聞いてません。

羽賀 何よ、舞ちゃん。嘘ついていたの？

舞子 ついてない。言っても、怒られるだけだから。

羽賀 先生、どういう事なんですか？

舞子 (羽賀に) いいのよ、ハサミ男は子供にしか見えないんだから。

羽賀 そんなバカ言ってるから相手にしてもらえないのよ。

アマ (タダーンに) ね、あの男、まだ生きてるんじゃないの？

タダーン まさか。

アマ 死刑になったっていうのは、子供だった私たちを安心させる為の嘘で、本当は施設か何処かに入れられていただけじゃないの？ ……ああいう人って、頭おかしいからって許されて出て来るじゃない。

タダーン ……いいや、そんな事はないはずだ。絶対に。

アマ じゃ、この状況をどう説明してくれるのよ。

タダーン ……。

カノ アマ、今、多田君を責めてる場合じゃないでしょ。

アマ は？ 責めてなんかないよ。ケーサツだろ！

多田 ダーリン、これは子供が言ってるだけだからね。

タダーン ……あの男が？

ミウ 何よ、タダーン。もういないんですよ？

タダーン ああ、俺、ちゃんと調べたんだ。あの事件のことは、ちゃんと、理解しなくちゃと思ってる。

タダーン、動揺を隠しきれず、背を向ける。

タダーン (頭を抱え) ……こんなことあるはずがない。でも。

アマ でも、どうしたのよ。

多田 ダーリン、落ち着いて。

と、タダーンを椅子に座らせる。タダーン、息が荒くなる。

アマ どういつもこいつも、何の為にこんな田舎町に残ってるの。

ミウ アマ。

アマ 解った。どうしてあなたたちがここに残れるのか。それは無神経さがなせる正義感なのよ。私はそうじゃないわ。私は逃げてるからね。かなわないものには立ち向かえないから、正直に逃げてるのよ。……でも、どっちが誠実だと思う？ 肝心な時に何にも出来なくて人に迷惑かける馬鹿と、鼻っからケツまくって逃げる馬鹿。……私は逃げてるわよ。でも、あんたたちよりよっぽど誠実だから。罪悪感はあるわ、この町から出ていったっていう引け目はね。でも、私はそれをちゃんと背負っている。ずっとね！

アマ、無意識に額の傷を手で押さえる。

ミウ アマ、黙って。怒鳴ったって、しょうがないでしょ。

アマ (額の手を離し) 迷惑なんだよ、あんたみたいな奴がサツやっているとさ！

ミウ アマ！

アマ 大人が舐められるんだよ！

ミウ 言い過ぎだって！

タダーンの無線から音がする。タダーン、無線には反応しない。うなだれながらも、黙ってアマの言葉を受け止めている。

ミチコ ハサミ男は死にました。私、覚えています。両親が話していたのを。

ミウ それ、本当なの？

ミチコ ええ。

アマ だからって殺される所を見た訳じゃないんでしょ？

ミウ 当り前じゃない。

ミチコ 大丈夫です。私を守ります。この教室で、誰が、どのような形で傷付けられる様なことも、私は許しません。

アマ 守るって？ ハサミ男だよ。

ミチコ 殺しますから。私、殺しちゃうと思うんです。もしも、ハサミ男のような酷い人が現れたら、私が、この手で。

ミウ みっちゃん、何言ってるの。

ミチコ 姉が殺されてから、父は別人になりました。あの男が死んでも、自分が殺した

かったと悔やんでいました。人を殺したいなんて、そんなことを口にする人じゃなかったのに。……私は、そんな人が一人でも増えるのが耐えられないんです。私は、もう父と同じですから。そういう人には、心から死んで欲しいと願う側の人間ですから。カノ―あなたは、真っ当に生きて行かないや。人を殺すだなんて。

ミチコ 幼い私に、心の傷は時間が解決することだと慰めてくれる親戚や、あの男を許すのです、全ては思し召しです。と、神の名を語る人も現れました。許すだなんて、あの死んだ姉を見たら、そんなこと言えるはずなのに。私は、そんな理不尽で頼りない神さまなら、救われなくてもいいと思いました。……私は、この教室で、誰かを傷付けるような人が現れたら。殺します。守ります、皆を。だから。

アマ もういいよ、わかった。やっちゃいな。

ミウ アマ、やめてよ。

アマ 黙ってよ。

ミウ (動揺して) 私は、人を殺すくらいだったら、殺される方がましよ。

アマ 黙ってなつて！

ミウ だって、人殺しになつちやうのよ、それって……。

アマ そんなに殺されたら、私が殺してあげるわよ。

ミウ 怖いこと言わないでよ。あんたがハサミ男になってどうするの。そんなの、自分の手首切るくらいにしてよね。

アマ 余計な口はさまないで。この子は覚悟があるんだから。

タダーン、ゆつくりと、何かを振り払う様に顔を上げ。

タダーン ごめん、僕がすっかりしなくっちゃ。

アマ いいのよ、タダーン。臆病なのは皆、知ってるんだから。出来ることだけでいいからさ、ちゃんとやろうよ。

タダーン ああ。ごめんよ。

多田 ダーリン、大丈夫？

タダーン ああ、大丈夫だ。すっかりしなくっちゃ。(立ち上がり) ……俺は、なんの為に此処にいるんだ。……ミチコちゃん。

ミチコ はい。

タダーン これは、とっても重大なことなんだよ。子供の噂だったらいいけど、本当に誰かの仕業なのかもしれない。

ミチコ はい。

カノ 誰かって、そんな事あったりするの？

タダーン 署で特別な対策を検討させてもらうよ。いいね、協力してくれるね。
ミチコ はい。

タダーン 今はとりあえず、皆で固まって、外に出る事にしよう。(無線に) すまん、
多田だ。教室にいる関係者九名、校舎から出てもらうことにする。

作業着を着た神野が入ってくる。
手には大きなスポーツバッグ。

エース きゃー！

一同、神野に驚く。

神野 ……皆、こんな時間に何やってるの？

宝田 何だよ。

神野 宝田さん、こんな所にいたんですか？

ミウ あ。この人よ、この人。私たちが遭遇した不審者！

カノ え？

ミウ タダーン、お縄にしなきゃ。ほら、何やってるの。

タダーン ……なんだ、神野かよ。

エース びつくりさせないでよ！

ミウ え？

神野 (ミウに) なんですか？

アマ ジジーンなの？ あなた。

神野 (アマに) 誰？

アマ 天野よ。

神野 アマなの？

アマ 久しぶりね。

神野 なんだよ、え？ バリバリ働いてそんな感じじゃないの。

ミウ ねえ、私たち、さっき会ってたのに、全然わかんなかったね。

タダーン 神野と会ってたのか。

ミウ そうよ、暗くてわかんなかったのよ。

神野 ミウかよ。あ、高野先生の知り合って、そういうことだったのか。

ミウ 地元に残っていたのね。すっかり、じじいになったわねえ。

神野 どういうことだよ。

アマ 町を盛り上げるって感じ、してるわ。

神野 (照れる) そんな勢いないよ。

タダーン 何しに入ってきたんだよ。

多田 ダーリンがメールで呼んだからでしょ。

神野 メール？ 何にも入ってないよ。

多田 あれ、平良やみんなに送ったんじゃないの？

タダーン 神野はとっくに入って来てたんだよ。ミウとアマが会ってるじゃないか。

神野 騒がしいな。表のパトカー、お前が乗って来たのか？

タダーン お前のせいだよ。ずっと、校舎の中にいたのか？

神野 ああ。ボランテアさ。

タダーン は？

神野 学校が大変だってね。ミチコちゃん。

ミチコ ……。

神野 だから、見回りを手伝ってあげているんだ。

多田 いつもこんなことを？

神野 手間がかかるね。……ねえ、宝田さん。

宝田 でもさ、やるときや言ってくれなきゃ。

神野 言ってませんでした？ ……あ、テレビ、消しときましたよ。

宝田 あ、悪いね。

羽賀 真面目すぎるんですよ、神野さんは。

神野 仕事終わってから何もする事がなくて。……景気が悪いから、残業もない。作

業はいつでも抜けられるし。(タダーンに) ……俺、今週、ランちゃんと学校前の交

差点にずっと立ってたんだぜ。

タダーン ああ、聞いていたよ。

ミチコ あの、神野さん。誰から事情を聞いたか知りませんが。

神野 誰って宝田さんだよ。

宝田 ちよいと、神野さん。

神野 怪しい奴がうろついているんだって？ みんなで探しているんだろ？

松尾 (宝田に) だから詳しいこと教えられないんです。

宝田 ちえつ。

ミチコ いいんですよ。こんなことをわざわざしてくれなくても。

神野 でもさあ、困っているんだろ？

ミチコ ご厚意には感謝してますが。

神野 いてもたってもいられないんだよ。

ミチコ 私たち、教師が責任を持つ問題なんです。

神野 力になりたいんだ。

ミチコ あの、神野さん。

神野 昔のことがあったから、俺たちは特別なんだって。

ミチコ 迷惑なんですよ、はっきり言って。今夜もこんな騒ぎになっているんです。勝

手に入入りされちゃ困るんです。

宝田 はっきり言うなあ。

神野 他の先生たちは助かるって言うてくれてるよ。(松尾に) ねえ。

松尾 ……はい。まあ、そうですが。

神野 ほら。

ミチコ 皆、気を使ってるんですよ、神野さんに。

神野 (松尾に) え、そうなの？

松尾 いえ。

ミチコ そうなんです。

タダーン 神野、これからは、俺たち警察が動くから。

神野 大丈夫かよ。

タダーン ああ、早急に対策本部を設ける。

神野 でも、人手が足りてないんだろ？ 市民の協力つっこの？ いるだろ？

タダーン いいんだよ。

神野 本当に大丈夫かよ。奴だったらどうするんだ。

タダーン 誰のことだよ。

神野 決まってるだろ、ハサミ男だよ。子供たちの間で噂が広まっているんだろ？

タダーン 知っているのか？

松尾 又、宝田さんですか。

宝田 俺じゃないよ。ハサミ男のことは教えてくれなかったろ。

神野 悪い予感しないか？ ちょうど、合唱コンクールの前だ。あの時みたいなことが

……。

タダーン いい加減なこと言うんじゃないよ。

ミウ やっぱり二人、仲悪いの？

カノ いつもはこんなんじゃないよ……。

多田 ダーリンが頼りないんです。すいません。

神野 お前なら、わかってくれるだろ？

タダーン ああ、解ったから。又、話をしよう。

神野 大丈夫かよ。お前、頼りないから。

タダーン 解ってるんだ。

多田 ダーリン、もういいんじゃないの？

タダーン 何がもういいんだよ。

多田 不審者って、神野さんが見間違えられていたんでしょ？ 部下の人、まだ校舎の

中、探し回ってるんじゃないの？

タダーン ああ。

多田 どうしたのよ、連絡してあげなきゃ。

神野 高野さあ、休んでたんだろ？ この一週間。

カノ ええ、自宅療養をね。

神野 自宅療養？ そんなのでいいのかよ。

カノ 私の代わりに毎朝、来てくれていたのね。

神野 楽ちんだよ、ランちゃん手慣れてるからね。

多田 いえ、こちらこそ助かりました。

神野 高野、皆で探してるんだよ、子供たちの噂の元を。心当たりのないの？

カノ それが、今、問題になってることも知らなくて。

神野 本当に？

カノ ええ。

神野 あのさ、こんなこと言うのもなんだけど。高野、アリバイっていうの、ある？

カノ 何？ 私の？

タダーン なに言い出すんだ。

神野 この一週間、何していたのか。……いや、気になってね。

ミウ カノが何したって言うのよ。

神野 こういうのは身内を疑えって言うじゃないの。

カノ ずっと、家に居たわよ。

神野 一人暮らしたろ？ 実家、近いのに。

カノ 私が嘘ついてるって言うの？

ミウ 家で休んでいたんでしょ？ はっきり言いなさいよ。

カノ ……それが、あまり覚えていなくて。

ミウ は？ 何言うのよ。

アマ この人にそんな趣味ないわよ。ハサミ男のフリして、子供たちを脅かしてるって
いうの？

カノ ……ずっと家にいたと思う。私、あの事件の後も一週間ぐらい休んだ。……し
っかり大人の目を見て話が出るようになるまで、一人、部屋に閉じこもってた。：

…私はその間、必死になって、目の前で起こったことを忘れようとしたの。あれは現
実はじゃない、悪い夢なんだって。……すると、親に連れられて学校に戻ったときには、
あの事件のことが何も思い出せなくなっていて。友だちがいなくなったこともわから
なくて、呆然としたことだけは憶えてる。……私、まるであの時の様になってしまっ
ていたの。大人になって、この学校で教師という立場になったのに。私、子供たちを
守らなくちゃいけないのに。

ミウ ジジーンね、あんた頑張ってるの、わかるんだけどさ。

神野 だって、困るんだよ。先生たちにはちゃんとしてもらわなくちゃ。……ねえ、ミ

チコちゃん。

ミチコ ……。

神野 本当に困るんだよ。

羽賀 舞ちゃん、もう帰りましょう。

舞子 ……ううん。
羽賀 どうしたの？

タダーンの無線から、音が鳴る。

タダーン (無線を取り) ……ああ、すまん、すまん。多田だ、どうした。

タダーンの無線から、小さく声もれる。「容疑者、確保。容疑者、確保……。」

タダーン 何？ 捕まえたって？

ミウ 何？ 不審者？

アマ ジジーンのことじゃなかったの？

多田 ダーリン、どういうこと？

タダーン どんな奴だ、特徴は？

エース ハサミ男なのかしら。

多田 まさか。

タダーン 抵抗してる？ 大丈夫か？

エース 怖い。

タダーン 何？ 女だって？

アマ 女？

タダーン 待て、待て。……来なくていい、俺が向かうよ。

ミウ どうしたの？ タダーン。

タダーン いいって、来るんじゃないって！

多田 ダーリン、大丈夫？

タダーン ある意味、大問題だ。

警官の岩木、一人の女(平良)を捕まえて登場。

岩木 多田さん！

平良 ちよつと、離してよ！

岩木 離せんよ、逃げるだろ！

平良 何よ！ 誰だってあんなに追いかけれちゃ逃げるわよ！

平良は随分酔っぱらっている。

タダーン 悪いけど、岩木。この人を放してやれ。

平良 (タダーンを発見して) あらら。

岩木 え? どういう事でしょうか。

カノ どうしたの? 平良、怪しまれるようなことしたの?

平良 (カノに) それがさあ、聞いてよ。

タダーン (岩木に) この人は通報された容疑者じゃないんだ。第一、女じゃないか。

岩木 それにしても、侵入罪です。

タダーン かまわん。(無線に) 捕まえた女は違う。パトカーで待機しろ。

岩木 (多田に) あの、事情を話してくださいませか。

タダーン いや、この人は俺が呼んでいたんだ。

岩木 呼んでいた?

タダーン 面目ない。俺がメールでこの学校に呼び出していたんだ。

岩木 はあ?

タダーン 紹介しよう。平良ちゃんだ。同級生で、遅くまで飲食業をされている。悪いが放してやってくれ。

平良 (岩木の手から離れ) ……ってことなのよ! 放してよ。

岩木 ちよつと見覚えあるなあと思ってましたけど。

平良 (カノに) 大急ぎで店、抜けて来たんだけど、塀乗り越えたら、この人たちに追いかけられて。

岩木 怪しまれるようなマネするから。

ミウ 平良。

平良 おく。久しぶり。アマもじゃん。

アマ 大丈夫。そんな恰好で。

タダーン せめて門で待ってろよ。

平良 だって、明かりついてたから。

岩木 多田さん。これ信用問題ですよ。

タダーン ああ。全くとってすまん。旧友が来ていて、つい。

アマ みつともないわね、いい年した大人が。

平良 ごめんねえ。(アマに) こっちで飲もうと思ったんだけどさ。

アマ 嫌よ。

平良 つまんないこと言うのね。

ミウ 何時だと思ってるのよ。あんた、子供が寝込んでいるんじゃないの?

平良 そんなこと、なんで知ってるのよ。

岩木 蘭さん、多田さん調子悪いの? 無線の対応もひどいし。

多田 ごめんね。

タダーン いや、本当に、悪いな。

ミチコ 多田さん、警官らしくお仕事なさってください。

タダーン ……そうだね、ミチコちゃん。
ミチコ お願いますよ。

ミウ ね、もう出ましようよ。いつまでいたっても意味ないでしょ？
タダーン 岩木。悪いがご婦人方を連れて出て行ってくれるか？
岩木 はあ？ 自分がですか？

タダーン ああ、今夜の騒ぎで動けなくなっていたんだ。

岩木 でも、その不審者は。

タダーン その、不審者なんだが、もう見つかっているんだ。

岩木 (平良を指し) この人じゃなくて？

タダーン 通報されたっていうのが、俺の知り合いでね。

岩木 その方も、呼び出されたんですか？

タダーン いや。…でも、全部、偶然なんだよ、本当に。悪いがパトカーに戻って
れ。

岩木 目撃者からは、常習犯だと聞いてますが。

ミウ え？

アマ そうなの？

タダーン (さえぎり) ああ、もちろん、俺から嚴重に注意しておく。

岩木、教室にいる人たちを見渡し。

岩木 (宝田に) ……あなたのことですか。

宝田 何で俺になるんだよ。

タダーン いいだろう、もう。

岩木 本当にいいんですか？

タダーン かまわん。みんな連れて行ってくれ。

岩木 ……。

多田 岩木君。この人のこと見てるから。

岩木 でも、蘭さん。

多田 大丈夫よ。

岩木 でも、どいつですか、その不審者って。

アマ いいんじゃないの？ はっきり言ったって。

タダーン いや、いい。

アマ (はっきりと神野を指し) この人よ、不審者って。

岩木、神野を見る。

岩木 ……なんだ、みどりのおじさんですか。

神野 (照れながら) こんばんは。

岩木 (笑い) 一体、どうしたんですか？

神野 うん、僕も何がなんだか。

岩木 (メモを見ながら) ……通報された、特徴通りですね、みどりのおじさんだったんだ。

神野 その、みどりのおじさんって呼ぶの。なんとかならない。

岩木 署じゃ、みんな言ってますよ。

神野 いいんだけど、嬉しくはないな。

岩木 息子がクリスマスにもらったコケシ、並べて玄関に飾ってありますから。

神野 コケシじゃないよ、エンジェルなんだけど……。

タダーン (岩木に) 神野は、用務員の宝田さんから、見回りをする約束をしていたらしいんだ。

岩木 ああ、じゃ学校から出るところを目撃されて逃げ込んだっていうのは？

アマ 逃げ込んだ？

タダーン (さえぎり) 詳しい事情は俺が聞いておく。

岩木 ええ。

多田 大丈夫よ、何にも起こらないって。

タダーン みんな連れて行ってくれ。……神野と二人になりたいんだ。

多田 ダーリン、私も残っていい？

タダーン 行ってくれないか？

多田 でも。

タダーン 帰ってくれ。

多田 あなた一人じゃ、岩木君、帰ってくれないよ。

タダーン ……わかったよ、好きにしろよ。

多田 うん。

タダーン 宝田さん、悪いけど、もう少し教室をお借りしてもいいですか。

宝田 え？ どうして俺に断るんだよ。

タダーン じゃ、高野。いいかい？

カノ いいわよ。

タダーン 岩木、皆を案内するんだ。

岩木 はい。

岩木、皆をつれて動き出そうとする。

カノ 多田君、残っていい？

「丈夫な教室」

タダーン 神野と話をするだけだよ。
カノ いいでしょ。

タダーン ああ。

アマ 私もね。

タダーン なんだよ。

ミウ 私も。

タダーン ……しようがないな。

平良 じゃ、私も。

タダーン 平良はいいだろ。

平良 いいじゃない。

宝田 だったら、俺も残ってやるよ。

タダーン 宝田さんも、本当、いいです。

宝田 戸締まりは誰がするんだよ。

タダーン ……わかりましたよ。

宝田 松尾、お前も残ってる。ゲーム返してやるから。

松尾 どうしてですか。

宝田 残れよ。

タダーン ……まいったなあ。

エース、羽賀、舞子は岩木に連れられて、出て行くとする。

タダーン、何を思ったのか、帰りがけの羽賀と舞子に近づき。

タダーン あの、羽賀さん。ちょっと、残っていただけますか？

羽賀 はい。

多田 どうしてよ。

タダーン 舞ちゃん、ちょっとおじさんに協力してくれるかい？

舞子 ……うん。

多田 何するつもりなの？

岩木 ……じゃ、行きましようか。

岩木とエースは出て行く。

タダーン (無線に) 岩木には出てもらう事にした。皆、パトカーに待機してる。

多田 待機？ 帰ってもらったら？

タダーン、慎重に神野に歩み寄り。

タダーン ……神野。お前、今夜、何しに入ってきたんだよ。

神野 だから、ボランテイアだって。

タダーン 逃げ込んだのはなぜだ？

神野 誰が言ってたんだよ。

タダーン 誰だっていいだろう。

ミチコ 私です。……神野さん。私が通報しました。

神野 どうして。

ミチコ 今夜だけじゃないでしょう。

神野 警察呼ばなくても。

ミチコ 私に気付いた時、逃げ込んだじゃないですか。

神野 ミチコちゃんだってわからなかったんだよ。近所のうるさい人だったら、説明するのが面倒だろ？

ミチコ どうして勝手にするんですか。

神野 ハサミ男を捜してるんじゃないか、皆の為に。

タダーン ……そのお前が、どうしてハサミ男になってるんだよ。

神野 は？

ミウ ……ジジーンが？

多田 ダーリン、何てこと言うのよ。

タダーン お前さ、ハサミを持ち歩いているんじゃないのか？

神野 なんだって？

タダーン (多田に) 言ってなかったか。毎朝、カノのかわりに来ていた神野が、ハサミを鞆に隠し持っていたって。

松尾 本当ですか？

多田 ……旗をしまうとき、見てしまった。不自然だから、ダーリンに相談したけど。

タダーン (神野に) お前、見られてたんだよ。……って言うか、見せてたんじゃないのか？

多田 でも、仕事前に道具もってただけかも。

タダーン 子供を守るのにハサミはいらないだろう。

多田 他の先生たちもいたんだけど、神野さんが怪しいなんて誰も思っていないよ。

タダーン 俺だって思いたくないよ。……でも、大人と子供の見方は違うんだ。ねえ、

松尾君。毎朝、挨拶したのに、気にも留めなかっただろ。

松尾 ……思いもありませんよ。

神野 冗談じゃないよ。人が善意でやってることなのに。

多田 そうだよ。

タダーン 大人には見えないんだ。

松尾 は？

タダーン ハサミ男は大人には見えないんだよ。子供たちがそう言ってるだろ？

多田 子供たちの話でしょ？ 真に受けないでよ。

タダーン (舞子に近づき) ……舞ちゃん。あの人じゃないかなあ、皆が言ってる怖い

叔父さんっていうのは。

舞子 ……。

羽賀 ご主人、舞子は見えないって言ってるんだけど。

タダーン おじさんが守ってあげるから。

多田 ダーリン、神野さんがそんなことする訳ないじゃないの。

タダーン じゃあ、神野。そのバックの中身を見せてくれよ。

神野 ……やだよ。

タダーン どうして嫌がるんだ。

神野 疑うのか？ 訳わかんないよ。俺たちは、事件の被害者じゃないか。

タダーン 俺もさっぱりわからん。お前からちゃんと話を聞かなくちゃ。…いいから、

見せてみる。

神野 疑うのかよ。

タダーン 見せろ。

神野 (抵抗する) よせよ。

多田 ダーリン、失礼だって！

神野 やめろって！

タダーン、神野から鞆を奪い、中身を取り出す。スポーツ新聞、週刊誌、仕事で使う軍手やタオル、懐中電灯が出てくる。

神野 何にも入ってねえよ。

タダーン 本当だ。

神野 なんて説明してくれるんだ。

タダーン すまない。

神野 (鞆の中身を戻しながら) 信じられねえ。どうして俺が悪さするっていうんだよ。

タダーン でも、近頃のお前は、どう見たっておかしい。

神野 お前たちがしつかりしないからいけないんだよ。お前こそどうかしてるよ。…どうして俺を避けていたんだよ。

と、立ち去ろうとする。

タダーン どこ行くんだよ。

多田 ダーリン、違うって、神野さんは！

神野 ランちゃん。問題あるよ、あんたの旦那。

多田 ……。

タダーン まだ服を調べてないよ。

神野 大人には見えないんだろ！

神野は憤慨し、鞆を机に叩き付ける。

舞子 あのおじさん、ハサミ持ってるよ！

羽賀 ……舞ちゃん？

舞子 ニタニタ笑って、ハサミをちらつかせるの。

神野 (迷惑そうに舞子を見つめ) あん？

舞子 (神野の視線に怯えながらも) 早く捕まえてよ！ ……あの人、怖いのに！

神野、胸に隠し持っていた大きなハサミを取り出す。

神野 ハサミぐらい、持っておかしいのかよ。

一同、驚く。

神野 なんだよ、皆。なんでそんなに驚くの？ これ仕事で使ってるんだよ。
タダーン 持ち歩きはしないだろ？

神野 おかしくないよ、商売道具さ。

タダーン わけを聞かせてくれないか？

神野 なんて俺をハサミ男にしたいんだよ。

タダーン したい訳じゃないよ。

神野 子供は、やっぱり俺をそんな目で見ていたんだな。

タダーン 神野、落ち着けよ。

神野 ハサミ男だって言われて、どう落ち着きやいいんだよ！

ミウ ……どうしちゃったの、ジジーン。

神野 探しているだけなんだよ、ハサミ男を。

タダーン いいんだよ、奴はもういないんだから。

神野 お前、言ってたじゃないか。まだお前の中であいつが生きているんだって。

タダーン ……なんてこと言い出すんだよ。

神野 俺は比較的、軽い方だと思うよ。…無傷だったからね。皆がやられるのを見ていた。思いつき走り走って逃げた教室の外から。でも、忘れられないんだ、あいつの目が。…直子を殺しちゃった。俺は、何にも出来なかった。当たり前だと思うけど、子供の俺には、何にも出来なかったよ。

と、教室の床に膝をつき、直子が倒れたとを感じる床に手を当てる。

直子の弾く「雨だれ」が聞こえてくる。

タダーン 俺だってそうだよ。しょうがないじゃないか。

神野 夢に出てくるあいつを何度も殺そうとしたよ。でも、殴っても殴っても手応えがない。…そして気が焦ると、物凄い力で胸を刺されるんだ。なぜか夢なのに、強い衝撃で、いつもそこで夢から覚めてしまうんだ。だから、俺は、あいつを夢の中で殺すにはどうすればいいか、ずっと考えていた。

タダーン だからって、何がしたいんだよ。

神野 直子の復讐がしたいんだよ。

アマ そんなこと言ったって、無理じゃない。

ミウ 何があったのよ、ねえ。

神野 事件のあと、頭の時計がずれはじめたような気がしたんだ。皆の傷が癒えていても、それはずっとおかしくて。皆が明るさを取り戻していけばいくほど、俺は取り残された様な気がした。ミウもアマも引越したりして、文字通り俺は取り残されて

いった。……あの男が死刑になったと言われてから、それまでかまってくれていた大人たちは、事件のことを忘れてしまったのか、興味を失ったのか、俺から離れていった気がしたよ。

ミウ そうだったの？

神野 成績もひどくなったよ。その度に母さんが、どうしたの？ って聞いてくるんだ。そりゃ、わからないって答えるしかなかったよ。そのうち、学校にも通えなくなった。

カノ でも、立ち直ったじゃないの。

神野 うん、何とかね。……ミチコちゃんが、ピアノを習い始めたんだ。放課後、音楽室から聞こえたよ。ショパンを弾いたね。直子と同じ曲を、同じ曲を何度も。……直子が殺された教室で、直子と生き写しの君がいた。生き返ったように、思えた。そのうち、俺の心の中で、君は直子になっていった。……時計はずれたままなのに、君のおかげで事件が不自然にぼやけていったよ。……でも、君は直子のように微笑んでくれなかったね。

ミチコ 私は姉さんじゃないわ。

神野 ああ、そうだよ。……でも、あの時の俺には、何が現実で、何がそうでないかってことなんか、理解できなかったんだ。

ミチコ 両親は、私にピアノを習わせました。でも、私は嫌いでした。姉さんの方が上手かったっていうのもあるし、姉の代わりになるのが嫌だったから。……両親は姉そっくりの私を、私の名を呼び、接してはいましたが、その目には姉しか映っていませんでした。それは、ちよつと悲しいことでもありましたが、私はそれで両親が救われているようで、我慢ができました。でも、両親以外、私を姉にすり替えることは、誰にも許したくなかった。

神野 その思いはなんとなく伝わってきたよ。その内、君は卒業して、よその中学に行つて、会うこともなくなつてしまった。時計は置き去りのまま、年月がたった。働く辛さのうちに、全てが紛れていってくれるような気がしたよ。……母さんが死んで、一人ぼっちになった。

タダーン 俺がいただろう。

神野 お前もカノも偉いよ。町に残つて、平和に勤めようと懸命になっていたからね。心から尊敬していた。新しい立派な校舎が建った。……なのに俺だけは何にもできずにいて。

カノ 出来ることだけでいいのよ。私、ずっとあなたを見ていたわ。みんなが、同じ思いを持っていてだけでいいの。

神野 思い出したいくないことが多すぎたんだ。学校の匂い、ピアノの音色。全てが、時間と共に風化してくれと、一人、心を閉ざしていたよ。

カノ でも、どうしてこんなことを？

神野 その思いの籠が外れることが起きてしまったんだよ。(ミチコに) ……君が、先

生になってこの教室に戻ってきた。そして、直子のようにピアノを弾き始めたんだ。ミチコ ええ。でも、あなたは相変わらず姉さんしか見ていなかった。

神野 君に嫌われて、どうしようもない憤りを感じたよ。でも、俺は解決の糸口を見つけたよ。……この教室で、机の落書きを発見したんだ。……ハサミ男が現れたんだよ。俺は思った。君を守らなくちゃって。あの時、直子を守れなかった後悔の念が漸く晴れる。そう思ったんだ。

アマ 落書きを見つけたの？

タダーン 何て書いてあるんだ？

神野 ハサミ男、死ねって書いてあったよ。

タダーン 何処に？

カノ その机よ。

平良が机を見る。

平良 これ、見覚えある。……アマの机に書いてあった落書き。

ミウ あんた、覚えてるの？

平良 忘れられないもん、この字。

タダーン どうしてこんなものが出てくるんだ。

神野 ハサミ男が出たんだよ。他にもたくさん書いてある。

平良 ウチの子、これ見て怖がってたの？

神野 探しまくったよ、あの男を。学校の周りも隈無く。……もう夢の中の様に殺される訳にはいかなからね、俺はいつもハサミを忍ばすようになった。……カノが音楽室で倒れたと聞いて焦ったよ。きつと、あいつが現れたんだ、そう思った。みどりのおじさんをやっていた時だった。ハサミ男だって言ってる子供の声を聞いたんだ。

多田 子供の噂話じゃないの。

神野 何処を探しても見つからなかったよ。でも、仕事の帰り、バックミラーに写った俺の顔が恐ろしく見えたんだ。最初は疲れているからだと思ったよ。毎日眠れなかったからね。でも、凄い目をしていたよ。その目は孤独で、何かを憎んでいた。そっくりなんだよ、夢の中のあいつに、瞬時に結びついたよ。俺がああ男だったんだ。いくら探しても見つかるはずが無い。子供たちは俺を見てそう言ったんだ。

タダーン 違うって！ お前は神野だよ。

神野 お前、俺を避け始めたよな。怖くなったんだろ、ハサミ男になった俺が。

多田 考え過ぎですよ、神野さん。

ミウ 子供が、ふざけただけじゃないの。

カノ 一体、誰がこんなこと。

神野 だから、ハサミ男が出たんだって！

アマ 信じるんじゃないわよ！　こんな傷痕、どうして出てくるのよ！

アマは乱暴に机を叩く。

ミチコ ごめんなさい。……その落書きは、私が書いたんです。

アマ 何よ。

カノ ……あなたが？

ミチコ あの事件の後に、両親に手を引かれて、姉がいた教室に入り、そこでみなさんの落書きを見つけました。……これは、姉が此処にいた証だと思い、両親にねだって写真を撮ってもらっていたんです。……だから、ここに、同じものを刻むことが出来ました。なぜ、そんな事をしたのかわかりません。……ただ、私の中で、姉の死は、まだ上手く処理ができてないんです。……葬儀の時も、あの棺に眠っているのは姉さんじゃない、信じませんでした。どうして？　見たくなかったです、悲しくなるだけじゃないですか。……私は、その思いが次第に怒りに変わっていることに気が付きました。それは、ゆっくり、長い時間をかけて変わっていった様な気がします。私は、恋人でも誰でも、理不尽に怒りをぶつけてしまうのはそう言う訳があるからなんだと思いました。私は常に怒りの矛先を、知らない何かに向けなくてはやっていられないんです。……それは常に、何処かに向かっている気が済まなくて。これは、私だけじゃないと思います。……どうしたら、怒りの連鎖は断ち切れるんだろう？　やられたらやり返す。でも、やられた方の悲しみを癒すのは何？　私が、この学校に赴任することを希望したのは、この教室に、私の気持ちを救ってくれる何かがあると信じていたからです。……でも、何にもなくなって。私は、姉がいた証を彫り直しました。でも、それは怒りの傷となって机に現れてしまいました。再び、みなさんの傷口を開けてしまったようです。すみませんでした。

神野 そうだったのかい。

宝田 後で始末書かいてもらわなくちゃな。

多田 黙ってて。

ミチコ (神野に) だから、止めてください。こんな無茶苦茶。いませんよ、ハサミ男だなんて。

神野 無茶苦茶なんかじゃないよ。君は怒りの矛先を見つけ出さなきゃいけない。その怒りで、奴を切り裂かなくちゃならない。

タダーン 神野。いいから、ハサミを渡してくれ。あの男はもう死んでいるんだよ。

神野 何度も聞くけど、それは本当の事なのか？

タダーン ああ、紛れも無い事実だ。

神野 どう苦しんで、なんて言って死んだんだよ。

タダーン そんな事、俺たちには関係ないんだ。死刑囚っていうのは、刑を受ける事で、

その罪を償った事になるんだ。

神野 勝手に周りが殺しただけだろ。これは俺たちの問題だったんだ。

タダーン でも、そうなんだって。

神野 奴は、俺たちになんて詫びたんだ。

タダーン だから関係がないんだって。

神野 お前、知ってるんだろ！ 頼むよ。教えてくれよ！

タダーン 知ってどうなるんだよ！ 俺たちの中の、あいつがいなくなるとでも思っ

ているのか！

神野 ……だからさ、多田。俺がハサミ男になるしかないじゃないか。

タダーン 正気か？

神野 わかんねえよ。

タダーン 頼むよ！

神野、じつと様子を見ていた舞子に。

神野 舞ちゃん。君たちが言ってる通り、おじさんはハサミ男なんだよ。おじさんはそいつが憎くってね。

舞子 ……。

タダーン だから、神野。お前、何がしたいんだよ！

神野 なあ、ミチコちゃん。この場でハサミ男を殺してくれるかい？

神野はハサミをミチコに差し出す。

神野 皆の歪んだ時間を元通りにするんだ。俺が死ぬことで、皆の中のハサミ男を一掃するんだよ。…皆には、俺がハサミ男に見えるはずだよ。あの事件で時間が止まってしまった子供たちだからね。

ミチコ でも神野さん。あなたが死んで、何になるんです。

神野 構わないよ、やっとな復讐ができるんだ。

ミチコ 死ぬことで？

神野 必要とされたいんだ。

ミチコ 姉さんはもういないんですよ。

神野 ああ、死んじゃったんだよ。でも、どうしてハサミ男は死なないんだ！

ミチコ 殺せません。意味ないじゃないですか。

神野 ……じゃあ、俺は、どうすればいいんだよ。

神野、ミチコに差し出したハサミを降ろし。

「丈夫な教室」

神野 じゃ、こうすればいいのか！

神野、舞子に向かいハサミを振り上げる。

羽賀 何するんですか！

舞子、神野から逃げる。机を押しつけ、追いかける神野。騒然とする教室。

タダーン 神野！

タダーン、神野を取り押さえようとするが、かわされる。

ミチコ 神野さん！

神野、ハサミを突き出し。

神野 ミチコちゃん。君が守ろうとしている教室で、誰にも穢されたくないこの教室で、人を傷つけるものが現れたら、君はそいつを殺すんだろう！

「雨だれ」が聞こえる。

宝田、平良、神野に向かって椅子を投げつける。

神野はかわし、再び、舞子を追いつめようとする。

タダーン、再び割って入るが突き飛ばされ、机が倒れる。

カノ 止めてよ！

ミウ、両手を広げ、無防備に神野の前に飛び出す。

ミウ ちよっと、待ってよ！なんってことするのよ、馬鹿！ やるんだったら私を殺しなさいよ！

神野 どいてくれよミウ！

ミウ のかないわ！

神野 邪魔だつて！

カノ 舞ちゃん、逃げて！

舞子、教室から懸命に走り去る。

アマ ミウ、引っ込んで！

神野 切られたいの？ ミウ。

ミウ あなたは、ジジーンよ。

ミチコ 神野さん！

神野、ミウに向かいハサミを振りかざす。

アマ、ミウの後ろから首根っこを強く引っ張る。ひっくり返り、咳き込むミウ。

ミウ ……痛い、何すんの！

神野、ハサミを振り下ろすと、アマの左肩を刺してしまう。

アマ (耐えながらミウに) ……馬鹿。

ミウ (咳き込み) 引っ張らないでよ！

アマ あんたが愚図なのよ。

ミウ (アマの様子に気付き) アマ！ 大丈夫？

タダーン 早く、救急車を！

平良 うん！

平良、救急車を呼ぶ。

アマ つゝ。

ミウ ……アマ。

ミチコ なんてことするんですか！

ミチコ、呆然とする神野からハサミを奪い取る。

カノ ミチコちゃん！

ミウ 誰か止めて！

ミチコ、神野を刺そうとするが、ためらい、崩れ伏してしまう。

間。

「丈夫な教室」

アマ、ゆっくりとミチコが握りしめるハサミを奪いとる。

アマ そんなに死にたかったら、私が殺してやるよ。

アマ、神野に向かいハサミを向け、近づく。

ミウ アマ！

カノ アマ、止めて！

タダーン 天野、よすんだ！

アマ、神野ともつれる。神野、机の上に仰向けに倒れてしまう。

アマ (神野にハサミを向け) 何よ、怖いのか？

神野 構わないよ、ハサミ男は死ねばいいんだ。驚いたただけだよ。

タダーン、強引にアマのハサミを奪おうとする。

タダーン やめろって！

アマ、タダーンを振り払う。タダーンはハサミで軽く手を切ってしまう。

アマ 引っ込んでなさいよ！

多田 ダーリン！

ミチコ 止めてください、天野さん。

アマ (ミチコを見つめ) この子を、人殺しにさせるんじゃないわよ！

ミウ アマ。

アマ あんたなんか、死にゃいいんだよ！

アマ、机の上に倒れた神野にまたがる。

カノ 落ち着いて！

アマ、ハサミを開いて神野の喉に突き当てる。

アマ 痛いでしょ。

神野 でも、切れるのかい、僕を。怖いんじゃないの？

アマ 男は血を怖がるけど、女は平気だから。

神野 本当に？

アマ あんたこそ、覚悟はいいの？

と、ハサミをぐつと押し付ける。

タダーン、ミウ、カノ、アマを止めようと近づく。

アマ 誰も近づくんじゃないわよ！

神野 痛い。

タダーン 止める！

アマ 黙ってよ、手元が狂うじゃない！

周りの誰も、アマに近づけなくなる。

アマ・・・もう少し押さえたら切れるわ、あなたの皮膚が。一斉に、深い、赤い血が溢れ出るの。薄いのよ、人の皮って、私、詳しいんだから。

神野 そうなんだ。

アマ 我慢なさい、楽にいかしてあげるから。

神野 痛いよ、アマ。

アマ なんてこと無いわ。何度も切ったもん、自分の腕。こうしてから、ひっかくようにして引くの。ヤバかったこともあったわ。動脈切っちゃって、あつたかいのが止まらなくなったの、大量に……。

神野 痛いよ。

アマ カラオケボックスのゲロ臭いトイレでやったの。血がタオルつたってみるみる床一面に広がった。……何でやったのか覚えてないわ。あるとしたら、孤独ね。あんたと一緒よ、生きるのが辛いよ。あたりが真っ赤になると、トイレは私の部屋に見えた。でも、棺にも見えてきて。

神野 君の自殺の話なんか、どうでもいいよ。

アマ わたしは、一度だって死のうなんて思ったことない！……血の床で、一人、遠くなる意識の中で、傷口を押さえる感触があった。もちろん、私の手だったけど、必死で押さえる手があった。死なないでって、言ってるようだった。何か匂いがした。あれはミウだと思った。意識の中で、ミウの匂いを嗅いだ。その手が私の傷口を押さえていた。私の額を必死で押さえてくれたように。一人じゃなかった。私は生きてる。

私は、一度だって死のうなんて思ったことない！

神野 アマ、でも僕は死にたいんだ。

アマ 死にたいって言うんじゃないわよ！

神野 痛いよ。

アマ 痛いよ、あなたは、生きているんだから！

神野 寂しいんだ。

アマは喉にあてたハサミを置き、神野の襟をつかみ。

アマ 死んじやだめよ！ ……私たちが、生きているんだから、あんたも私もこんなだけど、生きていくんじゃないの。

神野 苦しいよ。

アマ ハサミ男なんていないのよ！

神野 でも、アマ……。

アマ ねえ、ジジーン。私、あの男の目になっちゃってる？ あなたにも巣食う、あ

の男の目に私、なっちゃってるかなあ。

神野 なってないよ。

アマ 本当に？

神野 ああ、酷く、やさしい目をしているよ。

アマ あんたもそうよ。誰も、ハサミ男じゃないのよ。

神野 苦しいよ、アマ。

アマ 誰だって、苦しんでいるわよ。世の中に、そんな人、沢山いると思うよ。……甘えたこと言っちゃいけないのよ。……あんたが、どれだけ人の苦しみを背負えるって
いうのよ。

アマ、神野から手を離す。

神野 ごめんよ、アマ。

アマ、疲れ、脱力する。ミウはアマを抱きかかえる。

神野、重くうなだれる。

タダーン アマ、大丈夫か？

宝田 おい、救急車はまだなのか？

タダーン ……今、呼んでいます。

宝田 しっかりしろよ、お前たちがしっかりしなきゃいけないんだろ！

タダーン ……ええ。

アマ (ミウに) あんたを庇う度に、痛い目にあうね。

ミウ 大丈夫？

アマ 大丈夫じゃないわ、のろま。

ミウ ごめん。

アマ あゝ、いつまであんたを守るんだ。

多田 喋らないで、安静にして。

アマ だからさ、ちゃんと押さえ続けてよ。

ミウ 死なないで。

アマ 死ぬなんて口にしないでよ。縁起悪い。死ぬもんか。

多田 黙って、静かにして。

アマ でも、私が死ぬ時は、あんた、幸せさんなんだからさ。私がいけない天国に導いてよね。迷わないように。単純なまなこで先導してちょうだい。

ミウ うん。

アマ 押さえ続けてね。……寂しくなると、傷が痛むの。

ミウ、アマの額の傷をそつと押さえる。アマ、気を失ったのか、心地よくなつたのか、目を閉じる。

翌日、舞子はカノの前で作文を朗読する。

舞子 やられたらやり返す。途切れない暴力の連鎖を失くすことが、真の宗教の在り方だとガンジーは言っていました。なのに、争いは世界中で繰り返され、途切れることを知りません。私たちは、いろんなことをテレビで知ります。悲しい事件や問題をテレビで受け取ります。……けれど、私たちは新しい話題が出て来ると、何も解決していないのに、過去の問題を忘れてしまいます。私たちは、いつまでもその問題を背負って生きている人がいるということをお忘れてはいけません。

カノ ありがとう。がんばって、明日のコンクールの時に発表してね？

舞子 はい。

カノ ちゃんと眠れた？

舞子 あの、先生。

カノ 何？

舞子 昔に起こった事件をみんなに話してもらえますか？ ……私たちも知っておかないといけないと思うんです。……このままじゃ、忘れられてしまいそうで、しょうがないんです。

カノ うん、そうね。

舞子 辛いですか？

カノ いいわよ。……そうね、知っておかなくっちゃね。

舞子 すいません。

カノ あれはね。先生がみんなと同じくらいの頃。……あれはね、とても悲しいことだったのよ。

舞子 はい。

カノ 日吉先生も、他にも、沢山の人が。

舞子 ええ。

カノ あれはね、みんなと同じくらいの頃。……あれはね。

舞子 ……。

カノ あの事件は。

舞子 ……。

カノ ……あの事件は。

舞子 先生。

カノ ……ごめんね。

舞子 いいえ。

カノ 先生、どうしたのかしら。……そんな、覚えてないのに。

舞子 あの、いつでもいいですから。

カノ ごめんなさいね。……ごめんなさい。

舞子 先生、私たち、強くなりますから。先生たちが守る、丈夫な教室にいますから。私たちは守ってくれる先生たちの為に、きつと強くなります。

カノ うん。……ありがとう。

舞子 それから、先生。

カノ なんですか？

舞子 昔の卒業生の文集を読みました。これ、発表する私の作文と一緒に読んでいいですか？

カノ 又、どうして？

舞子 日吉先生のお姉さんが書いた所ですが、合唱コンクールの時に、ちょうどいいかなあと思つて。

カノ、やつと微笑み、うなづく。

舞子、文集に書かれた直子の日記を読む。

舞子 私は、ピアノを弾くのが好きです。

ミチコ、ピアノで「野ばら」を弾き始める。

舞子 それは、私の周りに沢山の友だちが集まるからです。ひまわり？

カノ ……ん？

舞子 (文集を見せ) ひまわりって言うのは、文の後にひまわりの絵が描いてあるからです。

カノ ……ああ。

舞子 カノ、ミウ、アマ、タダーン。中でもおかしなのが、ジジーン。チューリップ。

シユルエットの中でうなだれていた神野。ミチコのピアノを聞くと、まるで直子のピアノを聴いている様にゆっくりと頭をあげる。

舞子 彼は、いつも私を笑わせようとします。私が、体育館の壁に描かれている、天使ガブリエルが好きだと言ったら。羽を背負い、タンポポの花輪をつけて登場してくれただのは良かったのですが、綿毛を顔の穴という穴に入れて、中耳炎になってしまい、しばらく学校を休んでいます。マーガレット。でも、私、笑ってしまいました。やつと彼は、明日から登校するそうです。私はピアノを弾きます。みんなのために、いつまでも弾き続けます。彼は、明日、どんな顔をしてやってくるのか楽しみです。

「丈夫な教室」

カノ ……そんなこと、書いてあった。
舞子 はい。

ミチコ、力強く、「野ばら」を伴奏する。
昔の子供たちは「野ばら」を歌う。

了